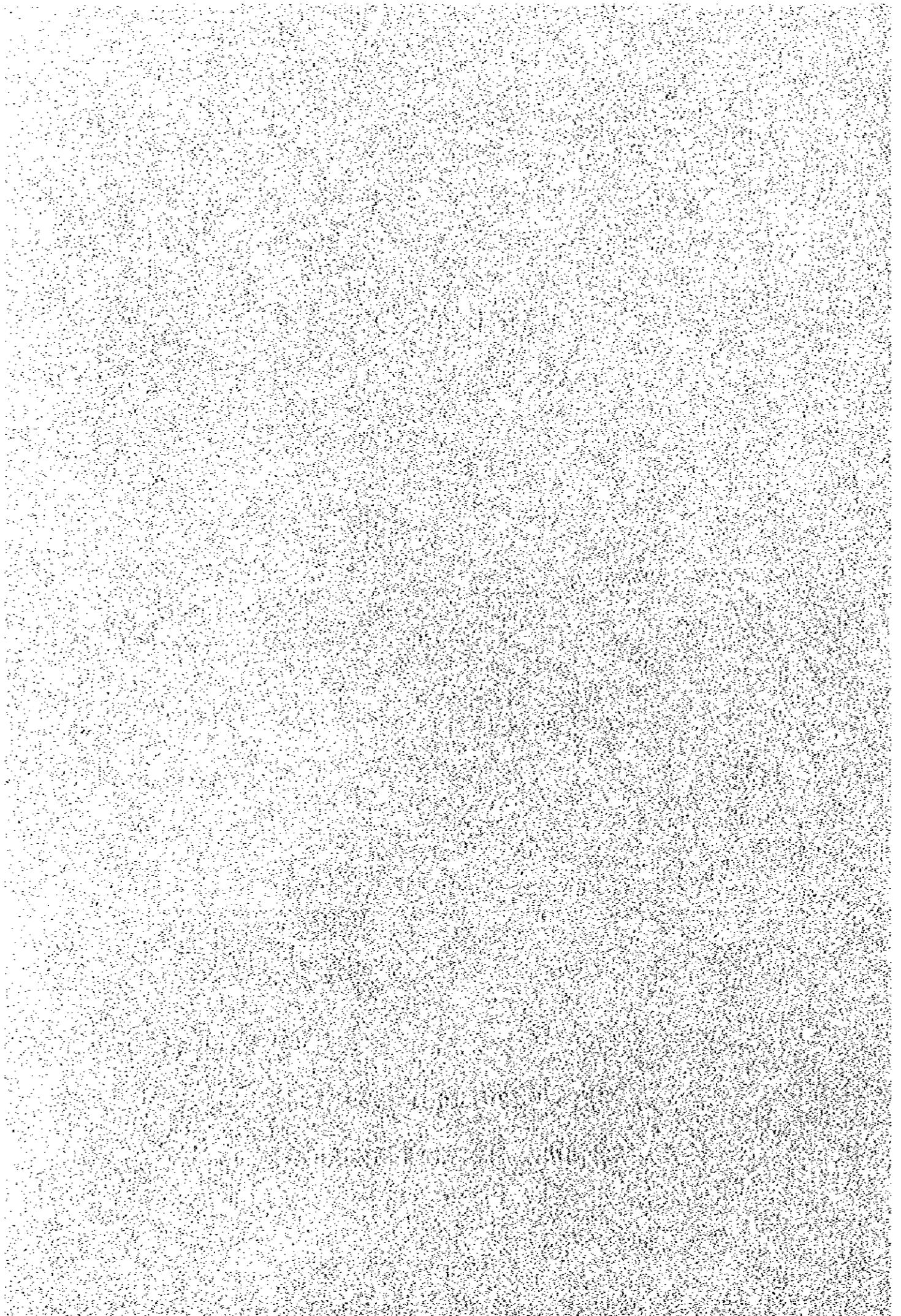


マレーシア

平成8年12月10日～12月18日

社団法人 日本国際生活体験協会



I. 調査目的

1. 調査目的

- マレーシアの国内事情を実際に見聞し、かつホームステイ体験を通じて、より正確な理解を図る。
- マレーシアの教育事情を視察し、今後の教育分野の青年受け入れプログラムの改善に資する。
- マレーシアの青年招へい事業の窓口機関と、日本でプログラム内容等に関する意見交換やマレーシア側からの要望についてヒアリングを行う。
- 帰国青年の職場視察や交流会を通じ、青年たちの日本における研修成果の確認を行うと同時に、日本との交流や関心の継続・発展に資する。

2. 調査内容

- (1) 国際協力事業団（Japan International Cooperation Agency：JICA）マレーシア事務所訪問
 - マレーシアの国情やJICAの活動内容状況及び青年招へい事業運営状況概説
- (2) マレーシア人事院（青年招へい事業窓口部局）訪問
 - 青年招へい事業運営状況に関する意見交換と要望事項の聴き取り
- (3) マレーシア教育省訪問
 - マレーシアの教育事情及び教育省のシステムについての聴き取り
- (4) マレーシア帰国青年同窓会（Persatuan Alumni Malaysia-Japan：PAMAJA）
 - 組織活動状況の聴き取りと青年招へい事業に関する意見交換
- (5) 学校訪問
 - マレーシアの教育事情の現状を視察
- (6) ホームステイ
 - マレーシアの一般家庭生活の体験を通じて、同国の生活様式や価値観等に触れ、同国文化のより深い理解を図る。
- (7) 帰国青年活動現場（職場）訪問
 - 帰国青年が滞日経験をどのように職場や帰国後の生活に活かしているかを調査する。

3. 調査団員

| | 氏名 | 所属先 | 青年招へい事業との関わり |
|------|--------|---------------------------------------|--------------------------|
| リーダー | 中村 幸士郎 | 山口大学教育学部 社団法人日本国際生活体験協会 山口地区委員会 | 分野別地方プログラム担当者 |
| メンバー | 岩熊 宏幸 | 財団法人少林寺拳法 | 共通プログラム武道鑑賞演武者 |
| メンバー | 小林 浩昭 | 東日本中央会計株式会社 | 分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者 |
| メンバー | 今岡 伸宇 | 青年海外協力隊 京都OB会 | 分野別地方プログラム ボランティア協力青年 |
| メンバー | 田中 聡美 | 社団法人日本国際生活体験協会 | 分野別都内プログラム担当者 |

II. 調査結果

1. 日 程

12月10日(火)

- 12:55 成田空港発 (JL723 便)
- 19:30 スパン国際空港着
- 20:55 ホリデイ イン シティセンター ホテル チェックイン

12月11日(水)

- 09:15 ホテル出発
- 09:30 JICAマレーシア事務所訪問
- 11:00 マレーシア人事院表敬訪問
- 14:00 昼食
- 15:00 マレーシア帰国青年同窓会 (PAMAJA) と打ち合わせ
- 16:30 在マレーシア日本大使館表敬訪問
- 18:30 ホテル帰着
- 19:30 ホテル出発
- 20:00 JICAマレーシア事務所主催文化交流夕食会
(レストラン TITIWANGSA)
- 22:50 ホテル帰着

12月12日(木)

- 09:30 ホテル出発
- 10:00 マレーシア教育省訪問
- 12:30 JICAマレーシア事務所主催歓迎昼食会(パンパシフィックホテル
内レストラン)

- 14:30 市内見学 (インターナショナル ユースセンター、国家記念碑、
チャンシーシューユエン寺院、パタフライパーク、国立回教寺院)
- 19:00 夕食 (レストラン SERI MELAYU)
- 22:00 ホテル帰着

12月13日 (金)

- 11:00 ホリデイ イン シティセンター ホテル チェックアウト
- 11:20 クアラルンプールタワー見学
- 12:30 ホームステイ地(ヌグリスンピラン州リンギ)へ移動
- 13:00 昼食(ドライブイン)
- 14:00 セレンバン州立博物館・市内見学(教育委員会会館、市場など)
- 17:00 ホームステイ対面式

12月14日 (土)

- 終日 ホームステイ

12月15日 (日)

- 午前 ホームステイ
- 午後 ホームステイ先から移動
- 18:30 ホリデイ イン シティセンター ホテル チェックイン

12月16日 (月)

- 09:30 ホテル出発
- 10:00 マラヤ大学訪問
- 14:00 昼食
- 15:00 青年活動現場 (PNB) 視察
- 18:00 ホテル帰着
- 20:00 PAMA J A主催歓送会
- 23:00 ホテル帰着

12月17日 (火)

- 午前 報告書作成のための打ち合わせ、ホテル チェックアウト
- 午後 自主研修
- 20:00 ホテル出発
- 23:00 スバン国際空港発 (JL724 便)

12月18日 (水)

- 06:20 成田空港着

2. 主要面談者

(1) JICAマレーシア事務所

西牧 隆壯 所長

西田 基行 所員

(2) マレーシア人事院 (Training Division : Look East Policy Section)

Principal Assistant Director Mr. Mohamed Ismail Yahaya

Assistant Director Ms. Rosita Bt Rahim

(3) マレーシア教育省 (School Division)

Principal Assistant Director Dr. Rohani Abdul Hamid

Officer to Director General of Education Malaysia

Mr. Hasnul Hadi Bin Hj Abdullah Sani

(4) PAMAJA (同窓会)

Mr. Abdul Rahman Bin Abdul Razak 会長

Mr. Haji Ibrahim Hj Mat Din 副会長

Mr. Wahab Bin Mohd Yasin 顧問

Mr. Razali Bin Raof 文化・芸術担当

Dr. Hj. Mohd Fuad Hj. Ahmad 会員

(5) 在マレーシア日本大使館

内田 晃 二等書記官

(6) マラヤ大学教育学部

Mr. Siow Heng Loke, EdD 副学部長・准教授

Dr. Mohd Sahar Yahya 准教授

Ms. Noryate Abdul Ghaffar 職員

(7) 青年活動現場 (Permodalan National Berhad)

Mr. Khairul Razak Moonier

Mr. Abd. Jalil Hj Yeop Majlis

3. 調査結果概要

- 今回の調査では、数多くの方々のご協力のもとに、マレーシアの国情理解・青年招へい事業に関する意見交換・帰国青年の活動状況把握など所期の調査目的を達成することができた。この訪問で新しく生まれた友情や体得したことは今後、各調査メンバーのそれぞれの分野で活かしていけるものと確信する。
- 教育分野に関しては、予定していた小学校訪問は、休校中のため調整がつかず実施されなかったが、教育省で教育システムの概要を、マラヤ大学ではその現状に触れて、実りの多い調査であった。
- 年末の繁忙期であったにもかかわらず、PAMA J Aの方々をはじめ、訪問先やホストファミリーなどが、ホスピタリティを発揮し私たちに対応してくださったことは、現地 J I C A の方々の熱意あふれる活動や、青年招へい事業の立派な成果であり、また今後の日本への期待の現れと痛感した。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ. J I C A マレーシア事務所

マレーシアの一般事情と J I C A の活動内容について説明をいただいた。

現在マレーシアでは、1998年までにクアラルンプールの完全国際都市化や（日本の霞が関のような）各省庁所在地の集約、2020年までに先進国入りを目指す国家目標の「ビジョン2020」に向け、国全体が活気づいている。調査期間中、大半を過ごしたクアラルンプール市内でも、いたるところで建設作業をしており、成長のすさまじい勢いを実感した。

そのような状況の中、J I C A は、都市部ばかりでなく地方における技術協力を通じた人材育成や福祉など多分野にわたり活躍している。よって、J I C A の所在や活動に対する評価や認知度は高く、今後の期待も大きいようである。

青年招へい事業については、年々よく知られるようになってきており、応募者も増加している。プログラムの運営は、日本側は情報提供とマレーシア側との仲介役を担当し、青年の選考やオリエンテーションは、マレーシア側の人事院（PSD）や PAMA J A で行っている。

ロ. マレーシア人事院

主な内容は、次のとおりである。

- 参加青年の選考については、現在国内の各分野で積極的に活動している青年約 800 人を対象に、IQテストと面接を行い、うち 150 人前後を選抜している。
- 教育グループの招へい期間は、マレーシアの学期を考慮して 10 月以降に設定してもらえると、より多くの適任者が参加できる。
- プログラム中の移動に伴う時間と労力の削減や、もう少し時間的に余裕のある日程にするため、移動回数をできる限り減らし、訪問先も絞り込んでほしい。
- ホームステイのホストファミリーは、毎年同じ家庭が担当する例が多く見られる。新

しい受入先の拡大をするなど検討を願う。

- ・青年招へい事業プログラム以外の交流として、マレーシアの学生が日本の大学へ留学する場合、日本語習得や大学の入学試験がかなり難しく、留学しづらい。受入側の大学でも、日本語研修プログラムの充実や、学部によっては、3年で卒業できる専攻など、韓国のようにフレキシブル、かつオープンなシステムができることを望んでいる。

ハ. 在マレーシア日本大使館

現地での活動内容やマレーシアの政治・経済状況の説明を受けた。現在のマレーシアは、政権は安定、全般的な政情も平穏なため、社会問題になるほどの犯罪は少ないが、最近では置き引きや集団スリ、いかさま賭博などの被害が多くなっている。

(2) 帰国青年活動状況

イ. PAMA J A

クアラルンプール市内のKOBENA社の会議室で、会長のラーマン氏以下同窓会のトップ6人と話し合った。出席者相互の紹介のあと、同会の組織・委員の所属・活動内容等について説明を受けた。

このKOBENA社は、マレーシア政府の文化・青年・スポーツ省等関係省庁の下で、大規模な住宅建設や倉庫、運輸等の事業の行う傍ら、PAMA J Aも関係している青少年団体活動に従事しており、その活動は極めて活発である。そして、会長を始め幹部数名がこの会社に所属していることもあり、PAMA J Aはこの会社から様々な点で多くの援助を受けているようだ。

これまで1,648人の青年が青年招へい事業に参加したが、マレーシア帰国後、所在が分かっているのは内約800人で、それ以外は、学校卒業後や転勤後の連絡先を知らせてこない場合など、連絡が途切れてしまっていることは、残念であるとのことだった。

青年招へい事業については、情報がよく広まり、応募者が増え、ますます競争が激しくなっている。2000年でこのプログラムを打ち切らないで、ぜひとも継続してほしいとの要望があった。また、PAMA J Aの会員は、熱心で明確な目標を持ち、日本についての勉強も継続している。もし、2度目の参加ができたなら、研修レベルを格段に高め、一層効果的に親密な相互の友情関係を深めることができると考えるので、両国のためにぜひ2度目の参加を認めてほしいと強い要望があった。PAMA J Aとしては、当事業ばかりでなく、マレーシアでの受け入れなどを通し、日本との友好関係をますます発展させていきたいと希望している。

ロ. 青年活動現場 (Permodalan National Berhad : PNB)

マレーシアで最も大きい投資団体の一つである。1994年勤労青年グループで参加したカイル氏を始め多数の帰国青年が活躍しているこの団体は、1981年マレーシア政府が、同国内の人種間の経済力格差を縮小するために設立され、現在では国内にとどまらず日本を含む海外への投資を拡大し、マレーシアの経済を押し上げている。同団体に長年所属し、PAMA J Aの副事務局長としても活躍しているスザンナ女史から、マレーシア経済の現状についてのブリーフィングを受けた後、活発な意見交換が行われた。

現在、経済が急成長しているマレーシアだが、日本で起きたバブル経済崩壊現象に対す

る防御策としては、あらゆる分野での海外進出や海外留学で習得したスキルや知識をうまく自国で活かし、自給自足ができるよう目標をたてている。

当事業の滞日経験から、時間の有効な使い方、勤勉さ、会社への忠誠心、先端技術、日本文化や日本人とのコミュニケーションの仕方など、多くの貴重なことを学んだ。そして、その成果は、帰国後の日常生活や日系企業との交渉等が多い仕事上でも役立っているとのことであった。このプログラムは21世紀以降も今後の両国のために、ぜひ継続してほしいとの要望であった。

(3) 交流会

イ. JICAマレーシア事務所主催交流夕食会

出席者：JICAマレーシア事務所 西牧所長、西田所員、飛田所員

日本大使館 内田二等書記官

PAMAJA ラーマン会長 他9名

調査チーム 中村 幸士郎、小林 浩昭、岩熊 宏幸、今岡 伸宇、田中 聡美

ラーマン氏よりホームステイを担当するアズミ氏の紹介があり、各団員ともに顔合わせをした。歓談の途中、レストランの呼び物でもあるマレーシアの民族舞踊を見学し、PAMAJAのメンバーに誘われ団員全員がステージに上がり踊りに挑戦。終始、アットホームな雰囲気、マレーシア流の歓迎とJICAの皆様の心遣いに感謝した。

ロ. JICAマレーシア事務所主催歓迎昼食会

出席者：JICAマレーシア事務所 西牧所長、飛田所員

調査チーム 中村 幸士郎、小林 浩昭、岩熊 宏幸、今岡 伸宇、田中 聡美

調査団より、それまでの調査結果の報告とお礼を述べた。JICA側から翌日より始まる地方でのホームステイに関するアドバイス等を受けた。

ハ. PAMAJA主催歓送会

出席者：JICAマレーシア事務所 飛田所員

PAMAJA ラーマン会長 他15名

アズミ氏

調査チーム 中村 幸士郎、小林 浩昭、岩熊 宏幸、今岡 伸宇、田中 聡美

ホームステイ中の失敗談などを交え、大いに盛り上がった。最後に、調査団長が団員を代表して、感謝の言葉を述べ、また、お礼の気持ちを団員の少林寺拳法のパフォーマンスや日本の歌の合唱で示した。PAMAJA側からも「昴」の合唱で返礼があり、その後、全員で手をつなぎ「今日の日はさようなら」の大合唱で、いつまでも絶えることのないマレーシアと日本の交流を願いつつ散会した。

(4) ホームステイ

| 氏名 | ホスト氏名 | ホスト職業・参加年度・家族構成 |
|-----------------|--------------------------|---------------------------------|
| 中村 幸士郎 小林 浩昭 | Azmi Bin Mohd. Nor | 調査員 平成2年度 妻・娘2人・息子1人 |
| 岩熊 宏幸 今岡 伸宇 | Abdul Raaman Bin Ibahim | プライベートドクター 息子夫婦・孫(男子2人・女子1人) |
| 田中 聡美 | Hjh Rantan bti. Hj. Mohd | 主婦 なし |

(5) その他

イ. マレーシア教育省

ディレクターのラハーニ博士より、教育省の組織・教育システムとその歴史、そして、教育目標や現場が抱えている諸問題などにつき、熱意あふれる説明があった。主にマレイ系、中国系、インド系の民族が6:3:1の割合で生活しているマレーシアでは、各民族の統合が大きな政策課題である。それは教育においても同様で、その目的としてまず民族の統合が挙げられ、次に各分野で活躍する優秀な人材の育成、そして教育の民主化となっている。また、急激な経済発展とともに伝統的な価値観が崩れ、モラルが低下している。いわゆる未婚の母の問題が生じ、教育関係者の対応が急がれている。

伝統的なイスラム教の価値観と工業化の進展による価値観の変化に、教育がいかに対応していくかが、今後の大きな課題になるだろう。

ロ. マラヤ大学

マラヤ大学教育学部の副部長以下2名の方を訪ねた。同大学内の日本文化研究所で、同大学や研究所のブリーフィングを受けた。約2,000人の学生が学ぶマラヤ大学は、広大なキャンパスを持ち、教育・物理・生物・会計・英語などの学部を設け、いずれも全国の高校から優秀な学生が選ばれて来ている。

日本文化研究所は、日本政府の援助の下、日本へ留学するための学生を教育するコースを設けており、現在約300人の学生が在籍している。

同大学では、先進国の仲間入りをするためには、科学技術が必要不可欠と考えており、そのためには60%の理系教育、40%の文系教育を目指しているが、現状はその逆となっている。改善のためには、初等中等教育レベルから、もっと科学に興味を持つような工夫が必要だが、現在のところ、数学や科学の体験学習用の時間が足りず、児童は週末に自宅でビデオで学習している状態である。大学側からこの問題についての意見を求められ、自然豊かな環境の中での短期台宿や国内留学(都会から地方へ)など、日本の体験的学習方法の有効性を述べた。

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

マレーシアの人々は、“Look East Policy”の影響なのか親日家が多く、心情的にも日本人に近いことに驚いた。礼儀正しく、慎ましく、温かい心が笑顔や物腰にあふれている。熱帯の木々や花も快い。近代化を急ぐ建設ラッシュに圧倒されるが、“WAWASAN 2020”どおり素晴らしい国に発展することは夢ではない。日本を最もよく理解する一国として、今後友好交流関係を多方面でますます広め、深めていくべきだと痛感した。

私たちが接したPAMAJAの青年たちは、青年招へい事業で学んだことを宝物のように誇り、日本への愛着を深め、仕事や生活の中で大いに活かしている。いずれの青年も職場で重要な地位を占め、特に時間の使い方、効率性、清潔さ等々について、研修体験を活かしており、力強く感じた。

今回調査チームに参加し、青年招へい事業のもつ意義と重要性が様々な点で実感できたことは、今後の大きな励みとなった。また、マレーシアの政治・経済・教育・文化・民族性等について研修ができ、同国にますます好感をいだくようになった。将来これらの体験を活かして、「友情計画」に参加する青年たちと心の底から本当に地に足の着いた研修や交流に当たりたいと決意を新たにしている。

(2) 団員所感

イ. 「親切尽くしのホームステイ」

中村 幸士郎

ホームステイ先は、クアラルンプールから南へ高速道路で約1時間の州都ズグリセンピランからさらに南南西へ田舎道を約40分、ゴムやパームオイルのプランテーションに囲まれた緑豊かなリング村。マラッカ海峡は西へ30分の距離。

農業分野で青年招へい事業に参加したアズミ氏に3日間お世話になる。

受け入れ家庭3軒に男子2人ずつと女子1人の計5人が分宿。一戸建ての地域は家も大きく、庭も広々としていて清潔であるが、男子4人が分宿した長屋地域では、散乱するゴミやおびただしい牛糞、長い間清掃されていないドブにまずびっくり。私は小林氏と10軒長屋の中ほどに住むアズミ邸のダブルベッドで2夜を共にするが、疲労のため何事にも起きず熟睡。一番良いベッドを提供してくれたご夫婦に感謝。

ご主人のアズミ氏は36歳、農業試験場勤め、果樹の育成が専門だが、現在は輸出果物の生産、出荷、経営基盤の整備に力を注いでいる。PAMAJAのこの州の責任者として、村長の片腕として、地元青少年の健全な育成や交流活動等のために、ボランティアとして非常に活発に活動している。熊本で農業研修を受けたこともあり、昨年8月に熊本の中学生と関係者18人の3泊4日の受け入れの世話をしている。

奥さんは小学校の先生で、約15キロを自動車通勤。授業は月曜から金曜の午前中のため、3人の子供たち(10歳と7歳の女子、3歳の男子)の世話は、近所に住む母親の協力を得ており、比較的気楽。上の2人は近くの小学校に通っているが、11月半ばから1月半ばは長期休暇で目下お休み。

マレーシアは赤道地帯で、12月でも真夏の服装。家の中では皆裸足。私は裸足にスリッパ使用、トイレ用のゴム草履も用意してくれた。トイレは紙なし、手桶手杓の手動水洗で

初体験。風呂は水溜めから手杓で冷水をひっかけるだけ。汗かきの主人は朝1夕2夜1の計4回はバシャバシャと勢いよく水を浴びる。イスラムのお祈り前の清めとも関係するのかもしれない。お祈りは私たち2人が寝てからの深夜と起床前の早朝に行っていた様子。

食事はテーブルで腰掛け式。すべて手で食べるが、私にはスプーンを出してくれた。

比較的食べやすい日常的なものと伝統的なものを奥さんが料理してくれた。なかなか素朴でおいしく、たくさんいただいた。奥さんは家の中ではイスラムの白頭巾ははずしている。おとなしくやさしく働き者で笑顔がなかなか素晴らしい。子供が3人いるにしては、いつもよく片づいている。

他の長屋より居間を広げて増築した分と入り口のたたきが立派に見える。革張りの大きなソファと自動車2台、この家庭が並み以上であることを示している。州都に家を買って改装中で、近く引っ越す予定とか。

初日の夜は田中さんのホームステイ先で歓迎会。村長さんも参加、全員の顔合わせ。老人は60数年前の日本軍の話。日本の将校たちは立派だったと昔話に悪意無し。君が代の合唱など。

2日目は朝早くから漁村に出かけ、安全チョッキも凛々しくボートで沖の貝の養殖場へ。絵に描いたような海岸のヤシの木々が感動的。人なつっこい子供たちが私たちを始終見守る。貝を試食、村長兼魚労長と奥さんの食事のもてなし。親切この上なし。

マレーシアで一番きれいな村と表彰された、色とりどりの花が咲き乱れる村を20人余りの子供たちをお供に一周、ヤシの実の下で記念撮影。なかなかいい気分。午後、海岸リゾートをドライブ。村に帰り、アズミ氏の親戚でご馳走になる。夜のパーティーの準備。ふたたび、田中さんのホームステイ先に多勢が集まり、あまたのご馳走。素朴ではあるが心のこもった大歓迎に感激。「四季の歌」の全員合唱、「花」の合唱、少林寺拳法の実演などなど。

3日目早朝、小学校・中学校・中国人学校を、休暇中のため外から見学。近くのゴム農園でゴムの採取を見学。結婚式のご馳走を村人と一緒に会食。再会を約束して、路線バスでクアラルンプールへ。実に盛り沢山の体験と親切に感謝。

このようなカンボン（田舎）の心温まる歓迎こそホームステイの神髄。日本でもまた実現したい。

ロ。「マレーシア調査団に参加して」

小林 浩昭

スコール降る中、夕刻の喧騒と人々の熱気に触れた時、2年前の懐かしい思い出が彷彿とした。人なつっこい人々の表情や親切な態度は変わらないが、クアラルンプールの街並みはすっかり様変わりしていた。世界一高いツインタワーを始め、美しい摩天楼や一流ホテルが並び、新しい鉄道が走り、高速道路の整備も進んでいる。緑豊かな南国の木々の姿が失われるのは残念だが、2020年に先進国の仲間入りを目指し急ピッチで発展するこの国の首都は、ASEAN諸国のリーダーたらんとする勢いを感じさせる。

調査チームの日程は予定通り進んだ。人事院、教育省、日本大使館、PAMAJA（青年招へい事業参加者の会）等を訪問した。なかでも会長のラーマンさんを始めとするPAMAJA関係者には食事の手配からホームステイ、その他様々な相談にのっていただき大変助かった。

私たち一行のホームステイ先はヌグリスンピラン州のリングというゴムの木とオイルパ

ームの木で囲まれた閑静な農村地帯であった。農道には牛が我が物顔で歩いているそんな牧歌的な所である。まず始めに、きれいな高床のお宅で午後のお茶をいただいた。村長さんも顔を見せ私たちを歓迎してくれた。家の持ち主である女主人はメッカに巡礼したことがあるので、ハジという敬称を持っている。メッカで生活するのを憧れる敬虔なイスラム教徒の手料理は実に美味であった。私のホストファミリーはヌグリスンピラン地区のPAMAJA代表のアズミさん一家だった。教員の奥さんと9歳の長女を頭に次女、長男の3人の子供に恵まれた5人家族である。マレイスタイルの入浴と食事をして、マレイシア人の典型的なライフスタイルを垣間見ることができた。あいにくドリアン等の土地の果物は収穫期を過ぎていてなかったが、アズミさんの親戚宅の庭にすくと伸びたココナツの木から実を落としてもらい、本場のココナツジュースを味わうことができた。また、伝統的な結婚式の昼食会に招待していただき、主催者である新婦の父親に握手をしながら密かに渡すご祝儀のやり方や、会の賑やかな雰囲気を経験した。お祝い事をビジネスライクにしない配慮は日本と共通するものがある。

また、全国で最も美しい村に選ばれた漁村にも招かれた。貝の養殖が盛んで、信望厚い村長さんを中心にまとまりのある村である。海へつながる村道の周りの家々には、道行く人々が楽しめるように様々な花が植えられている。何といっても土地の子供たちの屈託のない笑顔が忘れられない。

最後に、この調査を支えてくださった関係者の皆さんに心から謝意を申し上げたい。

ハ、「マレイシア調査プログラムを終えて」

岩熊 宏幸

12月10日夜マレイシア空港に到着。日本とは打って変わり、ネットリした暑さが体中に絡みつく。出迎えに来てくださったJICA職員の飛田氏によれば、12月は雨期とのこと。私たち一行は、これからの宿泊先となるホリデーインホテルにチェックインし、遅めの夕食を取りながら、お互いのことや明日からの日程について打ち合わせを行った。

今日初めて会うメンバーである。それぞれのバックグラウンドがなかなか見えないというマイナス要素も時には楽しい。

ホームステイが始まるまでの3日間は、関係省庁・協力団体等の表敬訪問と意見交換が主な活動となるため、事前にJICAMマレイシア事務所の西牧所長より、マレイシアの現状・政策等をお話しいただいた。

さて、いよいよホームステイ。一行5人はセレバンという町まで向かい、そこからPAMAJAのメンバーであるアズミさんの手配により、各ステイ先に落ち着いた。

「私以外のホストは英語は通じませんから」とアズミさん。もともと英語のできない私にとっては付け焼き刃のマレイ語を試す絶好の機会である。

今岡さんと私は、ラマンさんという老夫婦のお宅にお邪魔することになった。

ラマンさん一家は、息子夫婦と中学生の男の子、3歳の女の子、1歳の男の子の7人家族。しかし、息子夫婦は仕事で朝早く家を出てクアラルンプールに行き、深夜に帰宅するため、話をするのは最後までかなわなかった。

「ナマ サヤ イワクマ」まずは自己紹介からである。ラマンさんは、戦時中兵隊としてシンガポールにいたことがあるそうで、簡単な英会話とカタコトの日本語ができる。

「14000部隊」「イケノカミウエ部隊」「上等兵」「キミガヨワ〜」等の単語が口から飛び出す。その都度、遠くを見詰めるラマンさんの顔が今でも脳裏に焼き付いてい

る。

ラマンさんが住むこの一帯は、いわゆる日本の長屋のようなもので、マレイ系・インド系・中国系の人々が混在し、それぞれの文化を大事にしながら生活を営んでいる。午後、マレイ系の子供とインド系の子供が一緒に下校している光景には、多民族国家の持つ苦悩と強さを垣間見た気がした。

東南アジア独特の文化、イスラム教の習慣、たとえば、食事の作法やトイレの使い方、どれにも私は特別な驚きは覚えなかった。いずれも経験済みのことではあるが、それだけが理由ではない。同じ人間がそこで生きている以上、それは風土に密着した理にかなっていることだと思ふからだ。

だから、その地に行けば、私は、同じものを同じように食べてみたい。同じ乗り物で同じように移動したい。偉い人より普通のオヤジと話をしてみたい。民間交流はそんな簡単なことから始まるのではないかと、今でもそう信じている。

今回のアフターケアに参加し、私なりにいろいろなものを学び取ることができた。お世話になった現地 JICA の皆さんや PAMA JA のメンバー、そしてご協力いただいたすべての方々に改めて感謝したい。

二、「ホームステイ体験記」

今岡 伸宇

3日間のホームステイで私たちが訪れたのが首都クアラルンプールから車で約2時間ほどのところにあるセレバンというところである。私たちがその村に到着するとホストファミリーの方々が温かく迎え入れてくれた。村と言っても日本の住宅とさほど変わらない家が立ち並び、時折見かけるのが伝統様式の家である。

私がお世話になったのがアブドル・ラマン (75歳) さん宅である。

アブドル・ラマンさんは第二次世界大戦中、上等兵として戦争を経験しており、戦時には日本人と接することが多々あったという。そのためか、日本の国歌をいまだに記憶しており私たちに聞かせてくれた。戦時中の苦い経験や忘れられない貴重な体験談をいろいろ聞きたかったが、コミュニケーションの手段となる言葉に相互の問題があり、深く聞くことができなかった。次回、チャンスがあればぜひマレイ語の勉強をして訪れたい。

初日、私たちがラマンさん宅に着くといきなり5種類ほどの木屑を用意し何やら説明し始めた。よく聞くと、この木屑を熱湯で煮ると何にでも効果のある漢方薬が出来るということであった。海外の旅先でよく見聞きする光景なので、さほど驚きはしなかったが、ふたつの小石を見せてくれたときにはさすがにこの漢方の効果を信じた。その小石は、以前ラマンさん本人が胆石で苦しんでいたとき、漢方により体から取り出したものであった。現在この漢方の効果を知ってか、月に50人ほどの客が来るそうである。ラマンさんは村の周辺ではプライベートドクターとして有名のようである。

さて、ホームステイ前から興味のあった家庭のマレイ料理であるが、奥さんが腕によりをかけて作ってくださった。日々、5品ほどの料理を出してもらい予想していたほど辛くもなく日本人好みの味で大変おいしかった。特にチキンを煮込んだのスープは格別であった。変わった食べ物と言えば生卵、バター、醤油を交ぜてパンにつけて食べてというものである。最初は戸惑いを感じたが食べてみると大変おいしかった。また、甘いお菓子ではココナツの実で作ったようかんが珍しくおいしかった。私は以前アフリカで暮らしていたが、やはりアフリカとアジアとの食文化の違いをつくづく感じた。これも常に新しい味を

工夫する農耕民族と今日の腹を満たせばそれで良いという狩猟民族との違いであろうか。いずれにせよ日本は農耕民族であり食を常に楽しむ民族であることは間違いない。

2日目の午前には、マレーシアで一番美しいと呼ばれる海岸沿いの村に足を運んだ。そこには、美しい花が咲き乱れ、波の音が静かに聞こえ、近くには村の子供たちが戯れていた。マレーシアに来て初めて多くの現地の子供たちと接する機会が持て、心うれしく感じた。また来たいと思わせるような村であった。

午後にはホームステイ先の村に戻り、夜に催される私たちのための歓迎会の準備にとりかかった。またこのパーティーでも伝統料理がいろいろ出され会話と同じく食事を楽しんだ。この会では私たち日本人のパフォーマンスを披露、日本の歌、岩熊さんの少林寺拳法など、大変有意義な時間であった。

3日目は、午前中に村で行われている結婚式へ出席した。ただ残念なことに時間の都合で花婿花嫁を見ることができなかった。本来なら、式の様子を最初から最後まで見たかったのだが、この式場にはほんの30分ほど滞在しただけで食事の後には首都クアラルンプールに向かった。

今回のホームステイでマレーシアの一般生活様式も見ることができ、また、多くの現地の人々とふれあうことができたことは私にとって大変有意義なものであった。次回マレーシアを訪問する機会があれば、マレー語をマスターして現地の人々と交流を深めたい。

ホ. 「笑顔あふれるホームステイ」

田中 聡美

時代はますますアジアへと動いている昨今、私は幸せなことに青年招へい事業を通し、実施協力団体のプログラムコーディネーターとして、過去28人のマレーシア青年と出会った。プログラム中のホームステイを終えて戻ってくる青年たちの明るい笑顔や別れの寂しさに溢れた表情を見るたびに、私もいつかと思っていたのである。そして、ついにその時が来た。

日本の梅雨のような雲と湿気に包まれたクアラルンプール(KL)滞在4日目、そろそろ都会の生活の気疲れを感じ始めたころ、ホームステイは始まった。KL(土地の人はこう呼ぶ)から車で約2時間のリングという村で、伝統的な高床式の大きな家に住む女主人、ランタンさんが私のホストファミリーだった。マレーシアでのホームステイは初めてということで、何でも体験してみようと意気込んでいたものの、やはり言葉(マレー語は片言)や習慣の違い等、不安はぬぐい切れなかった。

しかし、ランタンさんのなんとも言えないやさしい笑顔を見て、そんな不安はすぐ吹き飛んでしまったのである。「よくきたわね。ゆっくりしてってね」。そんな無言のメッセージを含んだ彼女の素敵な笑顔に、私は心からリラックスすることができた。こんな時の笑顔の効果は、万国共通のようである。ホストファミリーとの対面式は、ランタン家で行われ、数々の伝統的なお菓子や砂糖のたっぷり入ったミルクティーを堪能した。他のホストファミリーとチームメンバーを見送って、ランタンさんのおいしい料理で夕食をいただいた後、ようやく落ち着いて話げできた。辛さ控えめの料理やミルク・砂糖抜き紅茶、加熱処理した水、そっとお皿に添えられたフォークとスプーン、防虫剤などの細かな心遣いに感謝感激だったが、なぜ彼女はこんなにも日本人の好みを知っているのか。英語でのコミュニケーションが可能だったので、その理由を聞いたところ、過去3人の日本人を受け入れており、その経験を活かしているとのこと。初めて受け入れた女子中学生はマレイ

語、英語ともあまり分からず、また、異文化への適応もままならず、彼女自身も苦勞したそう。私自身も仕事上ホームステイプログラムを担当しており、ホームステイ談議に花が咲いた。その後、お互いの身の上話となり、2人とも未婚だったので、両国での独身女性の暮らしぶりなど、夜中まで話は尽きなかった。

2日目の朝は、近くの国道を猛スピードで走るトラックの音が目覚まし代わりになった。起きてキッチンへ行くと、ランタンさんは5時半に起きてお祈りを済ませ、朝食も出来ていた。彼女は、過去2回もメッカに巡礼した熱心な信者で、お祈りは1日5回きちんと行うとのことである。1日目の夕方5時頃に、はるか遠い所からコーランの教えの放送が流れてきた時は、宗教と生活がいかに密接に結びついているかを、痛感した。

その日の午前を訪れたのは、1996年マレーシアで一番美しい村大賞に輝いた、海沿いの静かな村だった。人口約1,500人で、漁業関係者が4割、政府関係者等が6割を占めている。色鮮やかな花々が咲き乱れる村を見学している間中、10人以上の子供たちが珍しい訪問者である私たちの近くから離れようとしなかった。片言のマレー語で話しかけた私に、恥ずかしがりながらも応えてくれたその笑顔や、私たちにいつまでも手を振り続けていた姿が、とても印象的だった。

午後は、ホストファミリー宅へ戻り、夜の歓迎会の準備にとりかかった。外も薄暗くなったころ、続々とホストファミリーや村長さん、そしてご近所のみなさんが集まり、賑やかにパーティーは始まった。テーブルに所狭しと置かれた伝統料理の数々、歓談、お礼の気持ちを込めた調査チームからのパフォーマンス等あつという間に2時間ほどたってしまった。その後、男性陣はリビングルームでTVのスポーツ観戦、女性陣はキッチンで後片付けをしているところを見ると、男女の役割はこの国でも同じなのだと感じた。日本でも最近は多少その傾向も変化しつつあるが、経済が急成長しているマレーシアでも、そのような宗教的価値観が今後どのように変化しているのか、見守ってゆきたいと思っている。

3日目の朝も早かった。夜明けに起床し、ランタンさんとご近所の奥様方とともにポートディクソンで行われる、フードコンペティション（伝統料理の味を競い合う大会）に参加するためである。家から車を飛ばして1時間。会場に到着すると私たちが一番乗りだった。しばらくすると、色とりどりのパティックに身を包み、自慢の料理を持った女性が続々と集まって来た。大きなテントの中にある各料理別のテーブルに料理を置き、登録番号をもらう。その料理を数人の審査員が味見をして、各料理ごとのに3位まで決定するしくみだ。結果、ホストマザーが2つの賞を獲得した。

このような大会は、日曜日の午前中によく実施されるということだ。この後KLに戻るため、他のチームメンバーと合流し、ホームステイは友好裡に終了した。

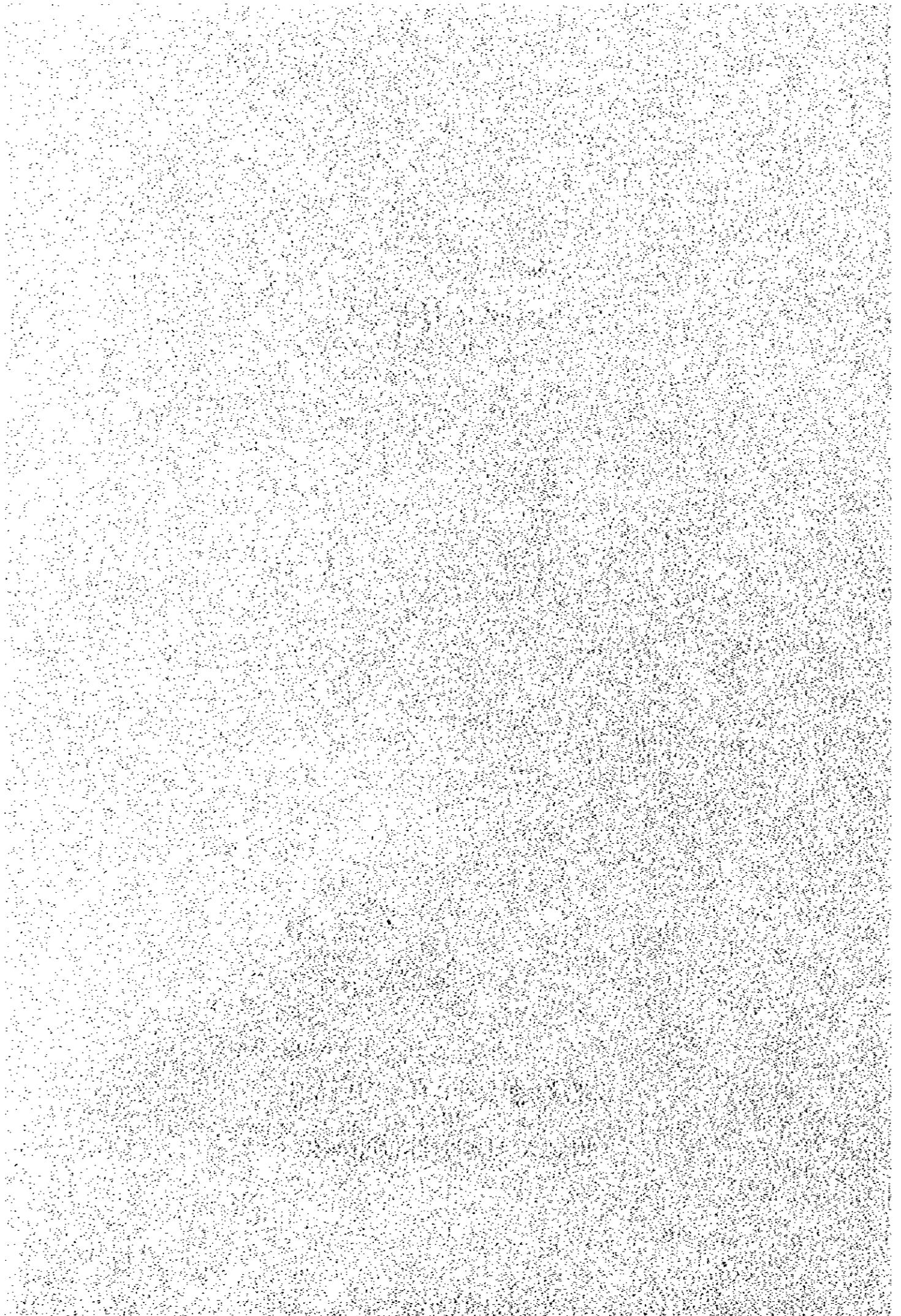
ホームステイは、正味2日間と短かったが、その中でたくさんの人々と出会い、トイレの使い方や水での洗髪など慣れないことに戸惑ったことや、ホストマザーに甘えてマレー語をあまり使わなかった反省点を含め、ここで体得したことはすべて貴重な経験であった。

また、アフターケアの調査は、いつもとは逆の“受け入れられる”立場で、表敬訪問・ホームステイ・見学等を経験したことにより、在日中にマレーシア青年たちが慣れない環境の中でのプログラムに参加する難しさや疲労具合を実際に体験してみて、たいへん参考になった。また一方で、新しい驚きや発見など様々なことを改めて確認でき、今後のプログラム企画や受け入れ上、大きな収穫となった。今回の調査に関わった熱心なすべての方々に、心から感謝したい。

フィリピン

平成9年1月8日～1月15日

財団法人 日本国際協力センター



I. 調査目的

1. 調査目的

- フィリピン側と、日本におけるプログラムに関し、意見交換及び要望調査を行い、青年招へい事業の一層の周知と理解を図る。
- 帰国青年の職場訪問や交流会などを通じて、青年たちの日本での研修成果とプログラムの改善点につき調査する。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency : J I C A) フィリピン事務所訪問

- フィリピンの一般事情、J I C Aの活動状況及び青年招へい事業運営状況

(2) 在フィリピン日本大使館訪問

- フィリピンの一般事情、青年招へい事業への関与

(3) フィリピン外務省北東アジア局訪問

- 青年招へい事業運営状況

(4) フィリピン帰国青年同窓会 (Philippine ASEAN-JAPAN Friendship Association for the 21st Century : P A J A F A -21) 訪問

- 同窓会活動状況

(5) 帰国青年との交流

(6) ホームステイ

- フィリピンの一般家庭滞在を通じ、フィリピン人の価値観などに触れ、同国についての正確な理解を図り、相互理解を深める。

(7) 帰国青年活動現場訪問

- 帰国青年がその所属先において、日本での研修で得た「知識」や「成果」をどのように活かし活動しているか、について実地調査を行う。

[訪問先]

- SGV-Development Dimensions International, Inc. (経営コンサルティング会社)
- Manalang, De Los Reyes & Associates (建築設計会社)
- National Economic and Development Authority (国家経済開発庁)
- Philman Commercial, Inc. (商社)
- Citibank (銀行)

- Philippine Export and Foreign Loan Guarantee Cooperation (フィリピン輸出外国
借款保証公団)

3. 調査団員

| | 氏名 | 所属先 | 青年招へい事業との関わり |
|------|--------|----------------|-------------------------|
| リーダー | 古川 眞之祐 | 小松市国際交流協会 | 分野別地方プログラム担当者 |
| メンバー | 谷本 良子 | 全日本なぎなた連盟 | 共通プログラム武道鑑賞演武者 |
| メンバー | 大崎 陽子 | 株式会社荏原製作所 | 分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者 |
| メンバー | 城間 恒浩 | 財団法人日本国際協力センター | 分野別都内プログラム担当者 |
| メンバー | 柳澤 智榮 | 財団法人日本国際協力センター | 分野別都内プログラム担当者 |

II. 調査結果

1. 日程

1月8日(水)

- 09:45 成田空港発 (JL741) 便
- 13:25 マニラ空港着
- 15:00 マンダリン・オリエンタル・マニラにチェックイン

1月9日(木)

- 09:45 ホテル出発
- 10:00 JICAフィリピン事務所訪問
- 13:00 昼食
- 15:00 フィリピン外務省北東アジア局訪問
- 17:00 同窓会 (PAJAF A) と意見交換
- 19:30 PAJAF A主催歓迎夕食会
(マンダリン・オリエンタル・マニラ、アダムルーム)
- 22:00 夕食会終了

1月10日(金) 経済分野帰国青年の職場訪問

- 08:00 ホテル出発
- 08:30 SGV-Development Dimensions International, Inc.
- 10:00 Manalang, De Los Reyes & Associates
- 11:30 National Economic and Development Authority (国家経済開発庁)
- 12:30 昼食
- 15:00 Philman Commercial, Inc.
- 17:00 Citibank

18:30 Philippine Export and Foreign Loan Guarantee Corporation
(フィリピン輸出外国借款保証公団)

19:30 ホテル帰着

1月11日(土)

午前 資料整理

13:00 ホストファミリー出迎え

14:00 アヤラ博物館見学

15:00 解散、各ホストファミリー宅へ

1月12日(日)

終日 ホームステイ

夕刻 各自ホテル帰着

1月13日(月)

14:30 社会福祉分野帰国青年との意見交換

17:00 フィリピンでの青年招へい事業運営状況についてJICA石賀所員より聴
き取り調査

20:00 同窓会(PAJAFA) 役員を囲んでの夕食会

22:00 ホテル帰着

1月14日(火)

終日 資料整理

1月15日(水)

09:00 ホテル出発

09:30 日本大使館表敬訪問

10:30 ホテル帰着

11:30 ホテル出発

14:45 マニラ空港発(JL742便)

19:40 成田空港着

2. 主要面談者

(1) JICAフィリピン事務所

後藤 洋 所長

石賀 みちる 所員

Ms. Jaqueline I. Ortiz 所員

(2) 在フィリピン日本大使館

廣川 誠一 一等書記官

(3) フィリピン外務省

Director of Asian Pacific Affairs Ms. Julia C. Heidemann

Mr. Roberto R. Reyes

(4) フィリピン同窓会 (PAJAF A)

President Ms. Evangellina G. Lawas (昭和 61 年度 ASEAN 混成公務員)

Vice-President Mr. John V. Atilano (平成 7 年度 ASEAN 混成経済 1)

Secretary General Ms. Jaqueline I. Ortiz (平成 8 年度経済 A)

(5) 帰国青年活動現場

イ. SGV-Development Dimensions International, Inc.

Ms. Serely Geraldine Alcaraz (平成 6 年度経済 B)

ロ. Manalang, De Los Reyes & Associates

Ms. Genalyn L. Garcia (平成 6 年度経済 B)

ハ. National Economic and Development Authority

Mr. Antonio L. Montorio (平成 5 年度勤労青年)

Ms. Christina M.C. Santiago (平成 7 年度 ASEAN 混成経済 2)

Ms. Milagros C. Amacanin (平成 6 年度 ASEAN 混成経済 2)

ニ. Philman Commercial, Inc.

Mr. Frederick Tan (平成 8 年度 ASEAN 混成経済 1)

ホ. Citibank

Mr. Yvan Norvin B. Go (平成 8 年度 ASEAN 混成経済 2)

ヘ. Philippine Export and Foreign Loan Guarantee Corporation

(フィリピン輸出外国借款保証公団)

Ms. Ruth L. Ulangkaya (平成 7 年度 ASEAN 混成経済 1)

Ms. Maria Josephine B. Magtaas (平成 7 年度 ASEAN 混成経済 2)

(6) 帰国青年との交流会

後藤 洋 (JICA フィリピン事務所長)

石賀 みちる (JICA フィリピン事務所所員)

Ms. Evangelina G. Lawas

Mr. John V. Atilano

Ms. Jaqueline I. Ortiz

Ms. Maritess A. Hipolito

Ms. Eva M. Guevarra

他 13 名

3. 調査結果概要

以下の項目について調査した。

(1) 経済分野及び社会福祉分野の帰国青年のプログラムに対する評価

- ・ 日本でのプログラムを高く評価している。
- ・ 日本理解の向上やホームステイを主とした日本人との心温まる交流を経験し、青年の帰国後も手紙の往復や日本人ファミリーのフィリピン訪問などの再交流が行われており、この事業は同国において予想以上の広がりを持っている。

(2) 日本でのホームステイ受け入れの留意点

- ・ 帰国青年宅でのホームステイは、フィリピン事情を直に経験する絶好の機会となり、日本でのホームステイ受け入れの際に留意すべき点が確認できた。

(3) 招へい分野、入選、帰国後のフォロー策などについて意見聴取

- ・ 参加者募集、選考手続きなどが漸次改善され、当事業参加者が国内の様々な地域、官民など広い範囲から選ばれるようになってきた。

以上の結果、今後の青年招へい事業を一層円滑、効果的かつ効率的に実施していくために留意すべきポイントが明確となり、両国関係者間で相互確認できたので、次年度以降のプログラム実施上、有意義なアフターケア調査となったものと確信する。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ. JICAフィリピン事務所

石賀所員、オルティス所員と調査日程などの打ち合わせを行った。後藤所長からは、「フィリピンから来日するだけでなく、日本からも来比することによって初めて相互理解が深まると思う。調査目的を達成できるよう健康に留意し頑張ってください」と調査団に対する期待と励ましをいただいた。

調査内容は以下のとおり。

①フィリピンにて実施しているJICA研修事業の種類

3種類の研修事業を実施。

- ・ 通常の研修…フィリピン人が日本で研修を受ける。
- ・ 第二国研修…フィリピンの地方の人が、マニラで研修を受ける。
- ・ 第三国研修…第三国、たとえばカンボディア人がフィリピンで研修を受ける。

②フィリピンでの青年招へい事業の入選・募集の方法やその実施機関

フィリピン外務省が、同窓会(PAJAFA)の協力を得て選考。その後、JICA事務所で確認。

③青年招へい事業の今後の動向(研修色を強化することについてなど)

JICAフィリピン事務所では研修色を強めていくことを十分認識しておらず、フィリピン側窓口（外務省北東アジア局）も同様との由。事務所側の説明によると、本部青年招へい課からの文書による通知はない、とのこと。

ロ. フィリピン外務省北東アジア局

面談者：Director Ms. Julia Heidemann
Mr. Roberto R. Reyes

下記の項目について意見交換を行った。

①青年招へい事業の意義について

ハイデマン氏より次のような意見が出された。

- ・日本とフィリピンとの間に友情を築くという目的は達成できているものと信じている。
- ・プログラム改善のため、フィリピン側も参加青年たちのプログラムに対する評価を知る必要がある。フィリピン側が実施に関わっている、現地オリエンテーション・プログラムについても、日本での評価会の要旨、アンケート結果を知りたい。

②プログラムの研修色強化について

青年招へい事業が近年研修色を強めていることを調査チームが確認した。

- ・フィリピン側は、歓迎すべきことである。しかし、「研修」と位置付けるには現在の招へい分野は定義が広すぎるのではないか。

③招へい分野について

- ・ハイデマン氏より、招へい分野をもっと狭く限定できないか、と強い要望があった。
- ・フィリピン側が年度ごとに必要とする分野で招へいしてほしい。現状の5年ごとの見直しでは、5年間は同じ分野に固定されてしまう。また、「経済」分野と一口にいてもかなり幅が広くなり、参加者の選考の際、頭を悩ませる。フィリピン側のニーズに柔軟に対応できるように、よりきめ細かな招へい分野の設定を年度ごとに行うことはできないか。

④参加者の入選方法について

参加者の入選方法や選考基準について調査チームより確認を行った。

- ・募集手続きは、まず外務省が窓口となり、国家経済開発庁（NEDA）を経て行われる。そのため事業開始当初は公務員の参加がほとんどであった。
- ・参加対象者を広げ、より公平な入選を行うため、1993年よりPAJAF Aに入選に加わってもらった結果、国家公務員だけでなく、地方や民間企業で働くものにも応募する機会ができた。

ハ. 在フィリピン日本大使館

マニラ滞在最終日、廣川誠一 一等書記官を訪れ、調査チームの目的、成果などについて報告した。大使館では、青年たちが日本へ発つ時の団結式において、担当書記官が出席し激励の言葉を贈るのが恒例となっている。報告内容は次のとおり。

- ・当事業がフィリピン青年たちから好評を得ていること。
- ・参加青年とプログラム中に出会った日本側関係者との交流が帰国後も続いていること。

二. 同窓会 (PAJ AFA-21)

主に、同窓会の活動について事情聴取。

[活動内容]

- ・ ニュースレター「カイビガン」の発行 (年1回)
- ・ 青年招へい事業現地オリエンテーション・プログラム支援
- ・ 招へい青年選考会への関与
- ・ 同窓会支部の強化 (40州のうち現在のところ9州で設立)
- ・ ASEAN コースフォーラム及び交流連絡会の実施
- ・ ASEAN 各国同窓会との共同プログラム実施
「小・中学生交換プログラム」(帰国青年の子供たちが参加)
- ・ ストリート・チルドレンのためのプログラム
「Paint-A-Can, Clean-A-Town コンテスト」
(各地区ごとに子供を集め、ドラム缶に色を塗り、芸術性を競い、自分たちの環境をよくしよう、と呼びかける活動)
- ・ 環境保全のための植樹活動
- ・ パンパンガでの医療奉仕活動
- ・ マリラック・ヒルズ国立女子更生施設での法律相談

[今後の活動予定]

- ・ ヴィエトナムへ Friendship Mission を送る。
- ・ PAJ AFA-21 憲章を作成する。
- ・ ASEAN 事務局を設立する。

同窓会は、単なる帰国青年の集まりにとどまらず、組織として積極的に活動しており、現在では、フィリピン法務省より非営利団体として認可されている。

同窓会は会員の会費で運営されているが、資金不足の問題を常に抱えており、小・中学生交換プログラムでは、ホテル滞在ではなくホームステイにするなど、経費節約を図り、どうにか対応している。

(2) 帰国青年活動状況

1月10日に、経済分野の帰国青年の職場を6カ所訪問した。

イ. 訪問先: SGV-Development Dimensions International, Inc.

面談者: Ms. Serely Geraldine Alcaraz, Associate Consultant

(平成6年度フィリピン経済B)

①青年の所属組織と職務内容

彼女は外資系経営コンサルティング会社のマーケティング部門で仕事をしている。

②参加の経緯

当事業に参加経験のある知人の勧めによるもの。

③当事業への要望

- ・ 民間人参加のための機会拡大
- ・ 日本における他国青年との交流

④当事業への評価

- ・ 研修・交流とも十分期待に応えうるものであった。
- ・ 日本人とのビジネスの際、円滑に意思疎通ができるようになった。

Ms. Alcaraz との対談では、彼女自身が当事業の意図を的確に捉え、しっかりした目的意識をもって参加していたことがうかがえた。

ロ. 訪問先：Enrique S. Manalang, Delos Reyes & Associates Architects
Engineering Planners

面談者：Ms. Genalyn L. Garcia, Junior Architectural Designer
(平成6年度フィリピン経済B)

調査団は、経営者はじめ事務所スタッフ全員の出迎えを受けた。彼らとの意見交換では、日本の職場についての話題が中心となった。

彼女のケースは中小企業でも個人がキャリア形成に努めるのを会社が支援している好例といえよう。公務員だけでなく、このような一般企業からも国家的な研修プログラムに参加することは、大変意義深いものであると感じた。

事務所スタッフの日本への関心の高さは意見交換の際の熱意からもうかがえた。実際、この会社の経営者は、当事業を次のように評価している。「Ms. Garcia が当事業に参加したことによって、事務所スタッフの日本や日本人への興味が増進したようで、他の社員にとっても良い刺激となった」。また、この調査団の訪問が「交流」の輪の拡大に役立ったと確信した。

ハ. 訪問先：National Economic and Development Authority(NEDA)

面談者：Mr. Antonio L. Montorio (平成5年度勤労青年)

Ms. Milagros C. Amacanin (平成6年度ASEAN混成経済2)

他3名

青年の主な意見を以下にまとめる。

①選考方法

参加者にマニラ周辺の公務員が多いので、選考時に地方、民間会社、NGOなどからも広く募るよう工夫すべきである。たとえば、将来的にはインターネットを媒体として応募要項を一般に開示することも、検討されてもよい。

②当事業への評価

- ・ 交流目的で参加した青年には、研修中心のプログラムでは満足できない。
- ・ 個々の青年の見聞を深めるという点で参加の意義は大きい。日常の業務で日本を担当している者は、日本訪問で得た知識、経験が、帰国後の仕事に直接役立っている。それ以外の者は、他国の人々との交流を通じて異文化に対する寛容性を学び、個人の成長に役立っている。

③研修色強化について

- ・ 「友情計画」という名目なので、そのつもりで参加した。研修とは、特定の技術を習得することであるので、日本で実施されるプログラム内容からも、当事業の目的は交流に主眼を置いたものと理解している。もし、この事業で研修色を強めると、日本政府が実施している他のプログラムと内容に差異がなくなり、本事業の友情計

画という当初の目的や独自性も失われる結果になる。

④同窓会（PAJAF A）への評価

今回面談した5人の帰国青年のうち4人がPAJAF Aの会員である。PAJAF Aについては、プログラムの精神を存続できる、すなわち交流という点で、存在意義のあるものと評価している。

二. 訪問先：Philman Commercial, Inc.

面談者：Mr. Frederick Tan, Sales Manager, Sales Dept.

（平成8年度ASEAN混成経済1）

①青年の所属組織と職務内容

工作機械などを扱う家族経営の商社の販売部長である。

②参加の経緯

出身大学から偶然紹介された。彼のような一般企業経営者は当事業の情報が伝わりにくいため、少ないのが実情。

③当事業への要望

一般企業経営者への情報提供と応募機会拡大。

④当事業への評価

- ・ ビジネス・メソッド、特に時間管理を学び、帰国後実践している。
- ・ 日本側参加者と交流を継続している。自分にとって貴重な経験であり財産となった。

ホ. 訪問先：Citibank

面談者：Mr. Yvan Norvin B. Go,

Head of Cash Management and Investment Registration

（平成8年度ASEAN混成経済2）

①青年の所属組織と職務内容

彼は現在、シティバンクの現金管理・投資登録部門の課長で、およそ10人の部下を持つ。

②参加の経緯

当事業に参加した同僚からの紹介。ビジネスで日本人と接する機会も多くあり、日本での経験が仕事上大きな助けになる、日本の株式関係機関を見る機会も得られる、多少の日本語の勉強もできるなどの有益なことが多く考えられたので、職場での理解が得られた。

③当事業への評価

- ・ 交流事業との認識で参加。他国の人との交流は人間の幅を広げる良い機会となると考え、その点で、自分の期待に十分応えうるプログラムであったと確信している。
- ・ ビジネスで日本人とのやりとりが以前より円滑にできるようになった。
- ・ 彼の面談を通じ、フィリピンにおいて、青年招へい事業は日本及び他国青年間の交流を促進し、友情を確立するための事業であることが十分理解されているようであった。と同時に今後、研修色を強めていく場合、彼のように第一線で活躍するビジネスマンが興味を持てるプログラム作りをするためには、様々な工夫が必要ではないかと感じた。

へ。訪問先：Philippine Export and Foreign Loan Guarantee Corporation

面談者：Ms. Ruth L. Ulangkaya,

Manager of Export Credit Services Dept.

Philippine Export and Foreign Loan Guarantee Corporation

(平成7年度 ASEAN 混成経済1)

Ms. Maria Josephine B. Magtaas,

Research Associate, APEC Foundation of the Philippines, Inc.

(平成7年度 ASEAN 混成経済1)

①プログラム内容への評価

- ・スケジュールも効果的に組まれており、全般的に高く評価している。特に、現地オリエンテーション・プログラムを含め、事前に配布された資料により自分なりの下準備もできた。
- ・共通プログラム「日本入門講座」も総合的にまとまっており、その後の分野別プログラムにおける日本理解に大いに役立った。

②当事業への評価

- ・日本人の人間としての側面に触れたことは、書物では得られない貴重な体験であった。
- ・日本側参加者、フィリピン側参加者、同グループの他国の参加者とも、多様なバックグラウンドを持つ人により構成されていた。これらの人々との交流は今でも続いており、これを次世代まで繋げたい。

③「交流」と「研修」について

- ・見聞、人脈を広めるという点で「交流」を、自分の能力開発の一環という意味で「研修」の両面をあらかじめ認識していた。
- ・結果、実際の仕事上で当時の人脈を活用できた場合もあり、また事前研修で得た知識が実務上活きることもあった。よって、当事業については、「交流」と「研修」両方の目的が備わっていると評価する。

(3) セミナー・交流会の実施結果

イ. 交流会

出席者：調査チーム 古川 眞之祐、谷本 良子、大崎 陽子、城間 恒浩、柳澤 智栄

JICAフィリピン事務所 後藤 洋 所長、石賀 みちる 所員

青年 Ms. Evangelina G. Lawas

Mr. John V. Atilano

Ms. Japqueline I. Ortiz

Ms. Maritess A. Hipolito

Ms. Eva M. Guevarra 他13名

同窓会主催の夕食会として、調査団が招待され、交流会が催された。仕事の都合で、同窓会との意見交換会に参加できなかった青年も駆けつけ、盛大な交流会となった。

まず、同窓会との意見交換会にて説明された活動内容について、スライドが上映された。現在までの活動内容および今後の活動予定の紹介と、活動の様子の写真が上映された。積極的に、また楽しみながら活動している様子がよくうかがえた。

その後、青年たちが帰国してからの活動などについても個々に話し合った。多くの青年は、コーディネーターやホストファミリーとの交流を続けている。仕事の面については、日本でのプログラムを通して、時間管理などを学んだ、と語っていた。また、この同窓会での人脈は、帰国青年間の公私にわたる支えとなっているようである。「日本で受けた歓待は忘れがたいものであり、このような形でお返しする機会を持つことができ大変うれしい」とラワス会長は交流会を締めくくった。

ロ. セミナー

出席者：調査チーム 古川 真之祐、谷本 良子、大崎 陽子、城間 恒浩、柳澤 智榮
青年

Ms. Evangelina G. Lawas,

Social Welfare Officer, DSWD-NCR Officer

(昭和 61 年 ASEAN 混成公務員)

Ms. Eva Guevarra,

Head of Makati City, Social Welfare Department

(平成 5 年 ASEAN 混成社会福祉)

当初、社会福祉分野の帰国青年の職場を訪問する予定であったが、受入側の都合により、JICA事務所会議室にて意見交換となった。

① Ms. Eva Guevarra

a. マカティ市の社会福祉事業

- マカティ市は、政策の優先順位をインフラ、教育、社会福祉としている。社会福祉の年間事業予算はマカティ市事業予算全体のおよそ 7%、1800 万ペソで、これは、ある地方都市の全事業予算に相当するという。
- 市長の下に選挙により選ばれた評議員が数人おり、その下がゲバラ氏が在職している Department Head (局長) になる。局は総勢およそ 150 名。家庭児童福祉部、地域開発部、特別援助部の 3 部から成る。
- 長い間貧困に喘いできたフィリピンがようやく活気づいてきたが、未だ貧しい人々は多く、そのための彼らに対する社会福祉事業の必要度は大きい。しかし、ただ与えてしまうのではなく、自立できるようなプログラムを実施している。

b. プログラムについての評価

- ゲバラ氏が来日した時期、フィリピンでは地方自治体法が改正され、福祉事業の多くは中央政府から地方自治体へと移管された。また、その改正の折、マカティが地区から市へ昇格、ゲバラ氏は市の社会福祉事業再編成の責任者となり、老人のための施設を企画することとなった。

日本でのプログラムは、高等職業技術専門学校見学、児童福祉に関する講義・視察、特別養護老人ホームの視察などであったが、この老人ホーム視察の 90% を企画書に盛り込んだ、とのことで、日本でのプログラムが直接現在の職務に結びついた好例といえよう。

- ASEAN 混成グループだったので、他国の福祉事業についても意見交換する機会を得ることができたので、非常に有意義であった。人脈形成もできた。

c. PAJAF A との協力

- マカティ市の社会福祉事業と PAJAF A が協力していくつかの事業も行ってき

た。ストリートチルドレン支援の事業“Paint-A-Can, Clean-A-Town”プログラムなどはその一例である。

② Ms. Evangelina Lawas

a. Ms. Lawas の所属組織と職務について

- PAJAF Aの会長でもあるラウス氏は、マリラック・ヒルズ国立女子更生施設の所長を長年務め、現在はその施設の所管官庁である社会福祉省メトロマニラ事務所に勤務して、事業の運営に携わっている。社会福祉省は事業運営に当たって全国を14の地域に分割し、各地域に地方事務所を設けている。マリラック・ヒルズはメトロマニラ事務所の管轄である。
- マリラック・ヒルズは性的虐待などを受けた少女が社会復帰できるよう支援している施設である。現在、ソーシャルワーカー、医師、看護婦など72人のスタッフがおり、270人ほどの少女がカウンセリング、職業技術訓練などのプログラムを受けながら、共同生活をしている。

b. PAJAF Aとの協力

- ラウス氏もまた、PAJAF Aとの共同プログラムを実施した。マリラック・ヒルズでのクリスマス・パーティーや施設内で生活する少女に対する無料法律相談などである。これはいずれも、PAJAF Aのメンバーの協力によるものであり、高い評価を受けている、とのことである。

(4) ホームステイ

| 氏名 | ホスト氏名 | ホスト職業・参加年度・家族構成 |
|-----------------|----------------------|--------------------------|
| 古川 眞之祐 城間 恒浩 | Poncevic M. Ceballos | 弁護士 昭和59年度 妻・息子2人・娘2人 |
| 谷本 良子 大崎 陽子 | Eva Guevarra | 公務員 平成6年度 夫・息子2人・娘1人 |
| 柳澤 智榮 | Frederick Tan | 会社員 平成8年度 父母・妹・姪 |

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

チームワーク抜群の5名で成果をたずさえて調査団業務を終えた。

イ. 交流目的と研修目的の両立

この青年招へい事業（計画の英語名称 The Friendship Programme for the 21st Century）についてJICA本部では各専門分野に応じた内容の研修を濃厚にしたいとの意向を近年鮮明にしてきた。今回、フィリピン側の関係者も、外務省のハイデマン北東アジア局長はじめ、PAJAF Aのメンバーなど多くの人々から基本的な賛同が得られ、大変好ましいことだと感じた。

ロ. アフターケア

アフターケア事業の重要な柱の一つは、同窓会（フィリピンではPAJAF A）の運営支援である。PAJAF Aは既にフィリピン法務局に登録した公認団体である。平成2年から、プログラム参加者の選考会にも関与し、候補者が偏らないよう牽制するなど影響力を行使できるようになった。また、現地オリエンテーション・プログラム実施にも大変貢献している。ラウス会長の強力な指導力にも深く感心し、信頼できる組織であると確信できた。

さらに、社会活動も幅広く熱心に行っている（会長がソーシャルワーカー出身であることも一因か）。今後、JICAフィリピン事務所が対PAJAF Aへの支援方針を明確にし、PAJAF Aとしっかり協調し、プログラムのフォローアップを進められるよう希望する。

それにしても、ラウスさんの肝っ玉かあさんのど根性と強力なリーダーシップ、関係者の献身には驚かされた。

ハ. フィリピン関係者

外務省、PAJAF A、帰国青年など1週間で20人以上の人々と会ったが、皆、素晴らしい対応であった。その結果、この事業のフィリピン国内での運営は相当しっかり行われていることを強く印象づけられた。

二. ホームステイの体験と交流継続

ホストファミリーとの交流は大変印象強く、フィリピン人のあふれるばかりのホスピタリティに感動した。ホームステイでの縁が続くことを願いつつ、日本でホームステイを経験した青年たちとホストファミリーの再交流の支援（どんな形がよいのか、は検討課題）ができるの良いと思った。

ホ. 交流効果の継続期待

在フィリピン日本大使館資料によると、フィリピンが受ける政府間援助の最大の相手国は日本であり、また、アメリカ合衆国に次いで2番目の貿易相手国でもある。こんな日本がもっとフィリピンの人たちの心の中にも友好国として受け入れられていくことを願い、その先導役を青年招へい事業経験者が果たしてくれるであろうことを期待し、これからの青年招へい事業の充実に関係者がますます努めていかねばならないと強く感じた。

(2) 団員所感

イ. 「PAJAF Aの人たちのエネルギーな生き方に乾杯！」：古川 眞之祐

まずは、ラウス会長（現在、社会福祉省のメトロマニラ事務所勤務のソーシャルワーカー。フィリピン大学夜間部の修士課程に学ぶ、勤労学生）の堂々とした態度と話っぷり。仕事をバリバリやっている様子が日に映るようだ。しかし、一方で、出勤時にご主人と腕を組みながら職場（たまたま方向が一緒なので）の近くまで歩き、いろいろなことを話し、相談もするという可愛らしいところもあり、魅力的なのだ。

さらに、役員諸氏がまた活発。ケバラさんに見られる家事と仕事の両立、女性の元気さにも心を打たれた。彼女はマニラのマカティ市社会福祉局長で150人ほどの部下を指揮す

るキャリアレディである。私たちを案内してくれた車の中から携帯電話で部下に指示を出し、いかにもやり手らしい印象を与えた。ちなみに、マニラで訪問した職場はどの職場も女性の姿が日本よりはるかに多いように感じた。それもアシスタントばかりでなく、いわゆる第一線のビジネスレディとして活躍しているのであった。あとで、何人かに聞いたところ、独身でなく、子供もあり、夫もあり、という人々で、子供はメイドに世話をしてもらい、自分は仕事をしているとか。また、メイドは農村部からたくさん来ており、その給与は1カ月5000円までいかないという。2馬力で仕事をすれば、メイド数人は十分雇える勘定だそうだ。このあたりの事情は日本は真似できないが、男女対等に職場で活躍するには、国それぞれの支援条件があるようである。

さて、女性ばかりでなくしっかり者の男性も紹介しよう。ホームステイでお世話になった、ヴィック・セバロスさん（自称「フィリピン盆栽協会会長」、法律事務所経営、37歳）。マニラ郊外の屋敷には、庭に椰子の木が5本、また、数百鉢の盆栽もある。帰国の日、ホテルで会えず、わざわざ、マニラ空港まで、ドライマンゴーとフィリピンの歌手のCDをお土産に届けてくれた、カラオケ好きで、大食家である。子供3人、奥さん、ヴィックの5人家族で、彼らとともに教会に末っ子の洗礼に同行し、とても微笑ましい家族関係を見て、やはり家族はいいなあと感じた。また、仕事バリバリ男にはゆっくり体と心を休める「港」としての家庭が必要だと思った。

とにか、個性あふれる生き方の見本を示してくれたPAJAF Aのメンバーたち。初めて会う私たちはそのエネルギーにみな本当に驚いた。仕事もバリバリ、家庭生活もいきいき。これだけの頑張り屋さんたちは、それぞれに忙しさとバランスのとれた家庭でのくつろぎを持っている。そして、このエネルギーをいつまでも持続して、その中に今回の調査団の受け入れで示してくれた国際交流活動も継続してほしいと思った。

フィリピンの経済指標をみると、まだまだ開発途上国の位置づけだが、私たちが会った人たちはそれを支え、さらに発展させる推進力を確かに備えていた。PAJAF Aについては、ラウス会長の存在が大きすぎて、もし、ラウスさんが引退したらPAJAF Aの活動はどうなるのか、私個人としては少し気にかかるところだ。とはいえ、役員会のメンバーがしっかり継続的に活動を展開していつくれるだろうとも思う。今後もPAJAF Aはこの青年招へい事業を有意義に進めていく強力な味方になってくれるだろうことを確信し、その活躍にエールを送り続けたいと思っている。

ロ、「私の感じたホームステイとフィリピン事情」

谷本 良子

アフターケアー調査団の一員として参加することになり、その責任の重大さと、フィリピン事情がマスコミ等ではあまり良い印象を得ていなかったのことで、気の重い不安な日々を過ごし当日に至った。マニラ空港に到着後JICA事務所より渡された資料には、市中には60万丁の銃器が氾濫していることや、犯罪から身を守る方法等が記されており、不安は募るばかり。その上、ホテルまでの光景は、多種多様の車の多さ、排気ガス、けたたましいクラクション、昼間だというのに手持ちぶさたにたむろしている大勢の若者、銃を持ったガードマンの多いこと等、目をみはるものばかりで、これから1週間、他の団員に迷惑をかけずにやっていけるだろうか、重責は果たせるだろうか、とますます不安になった。

しかし、1週間後同じ道を通り帰国する私は、困惑ばかりしていた自分が嘘のようにこの光景を自然に受け入れることができた。このような思いにさせてくれたのは、フィリピ

ンの人々の明るさ、心の豊かさと前向きに生きる姿に日々接することができたからである。

たとえば、PAJAJFAのラウス会長はじめ会員の方々が心から歓迎してくれたこと、1994年（ASEAN混成社会福祉グループ）参加のエヴァさん宅へホームステイしたこと。エヴァさんはマカティ市に住み、ビジネスマンのご主人と11歳、7歳の男の子と8カ月の女の子、ご主人のご両親と弟たちとの大家族で暮らしている。フィリピンでは年寄りを大切にするので大家族は当たり前だという。

宿泊したのは、自宅から車で1時間半ほどのラグーナという町にあるエヴァさん一家の別荘だった。特に来日経験のあるご主人は大変な親日家で私たちが快く迎えてくれた。翌日、フィリピンの英雄ホセ・リサールの生家を訪ね、フィリピンの歴史に触れる機会を得た。また、別荘近くのたくさんの日本企業の工場にも行き、ラモス政権になって経済が上向き、外国企業の進出が本格化し始めていることを目の当たりにすることができた。料理は苦手と言いながらもエヴァさんが作ってくれたフィリピン料理は、実際とても美味だった。不安でいっぱいだったホームステイも有意義な時を過ごすことができ、ホストファミリーには心から感謝している。このように多くのフィリピンの人々との触れ合いを通じて、あまりにも貧困のイメージが強すぎた固定観念でフィリピンを理解したかのように思っていた自分のあさはかさを痛感した。

フィリピンでは「いじめ」はないという。自分自身のことをよく理解し、人と競ったりしないからだという。それに比べて、日本ではあらゆる面で目まぐるしいほどの速さで変化していき、多くの人々がその流れに遅れまいと慌ただしい毎を送り、精神的ゆとりのある生活ができなくなっているのではないかと。自分だけ良ければ、という自己中心的な人間が増えて、心の豊かさがなくなっているのではないかと。今回フィリピンの人々の心の豊かさに触れて強く感じた。

このような貴重な経験ができ、また、他の団員に大変お世話になり感謝している。私が現在ASEANの青年に接することができるのはわずかな時間ではあるが、今まで以上に心から歓迎し、武道を通じて日本の素晴らしさを理解してもらえよう努力したい。

八、「合宿セミナー経験者としてアフターケア調査団に参加して」 大崎 陽子

ここ数年のGDP成長率（ちなみに96年は前年比5.1%）が大きく背けるマニラ首都圏の活気と、そこで日本で経験を生かし、生き生きと働いている帰国青年との出会いが大変印象的な1週間であった。

街のいたるところで見受けられたビルの建設現場や地域開発の現場等、また滞在中私たち調査団を最初はびっくりさせやがて諦めさせたひどい交通渋滞と大気汚染も、フィリピン経済の躍動ぶりを肌で感じられる一コマであった。また、ホストファミリーに連れてもらったショッピングモールは床面積で東南アジア最大規模を誇る巨大なもので、しかもそこが週末には大勢の人で埋め尽くされている様子を目の当たりにして、フィリピンの経済構造も、これまで富の受給者がある一定の富裕者に限られていたものから徐々に変革の時期に来ていることを実感した。

今回企画された青年の職場訪問のうち、官公庁においても、テイクオフしたフィリピン経済の闊達な様子がみてとれた。特に印象に残ったのは、女性が文字どおりバリバリと働いていた様子である。他のアジアの国に比べても女性が主要なポストに占める割合は高いと聞いた。あくまでも実力主義の結果、とのこと。公務員の給料は民間企業に比して高い

とは言えず、職務内容に魅力を感じるかもしくは安定性を重視して公務員を志望するケースが多い、とは 35 歳の若さながらマカティ市社会福祉局長を務め 150 人の部下を有するエヴァさんの談である。もっとも、公務員といっても、実力に応じて、昇格を目指すために大学院に通い学位を取得することなどの自分への投資も求められている。これは逆に言えば、フィリピンの公務員の場合、熾烈な競争社会の中で担当する高度な専門知識がより多く求められ、ジェネラリストよりもスペシャリストが一般的ということだ。日本では一般的な部署転換もフィリピンの場合、自分の専門分野以外に配置転換されることは少ないそうだ。そのせいであろうか。今回ヒアリングした公務員の方の話を聞いていて、特に感じた点は、同じ役所の中で同一の分野にいながらも、自分の担当外のことについてあまり知識も持たず、また把握しようという意識が希薄なことである。もちろん、組織の中で自分の担当外のことについて詳細を承知していることに無理もあろう。しかしながら、私が感じたことは、日本の企業においては、当然自分の会社の全般の業務内容はある程度承知していることが求められるものの（自分の担当の仕事と同じ分野の仕事なら尚更に）、フィリピンで今回ヒアリングした限り、他人が担当する仕事について、自分の担当でないから大よそのことも分かり得ない、また知っておく必要もない、という管理職に就いている人からの発言があり、日本とフィリピンの仕事の捉え方の違いを感じた次第である。またこの捉え方の違いからか、たとえ部署転換をした場合でも前任者から仕事の引き継ぎをし、組織全体の効率を高めようという意識は薄いように見受けられた。あくまでも前任者の業績と自分は別のもので、自分は自分のペースで仕事を進めて業績を上げ、ワンランク上のポストを目指すのだ、というのが、今回私が聞いた話である。少々乱暴な捉え方かもしれないが、組織で動く日本と個人ベースで考えるフィリピンということであろうか。官公庁においても個人主義が生きている点が興味深かった。

私は平成 7 年度に開催された 2 泊 3 日のフィリピン青年との合宿セミナーへ参加した。数日の交流だったにもかかわらず、そこで個人的にも仕事の上でも生涯にわたって友情を深めていけると確信する何人かのフィリピン人を友にできた。したがって、この青年招へい事業については、プログラムの完成度が高く、また成果もそれなりに評価できるのでは、と自分なりに考えていた。

今回、この事業に関わるフィリピン外務省、帰国青年との対話から総括して、当事業に対する評価は、それを短期的に見た費用対効果の観点から見ると、長期的な観点からみると異なるであろうが、私個人的には、相互理解のもと友情を育て日本をよく理解してもらおう、という当事業発足の目的はなし得ていると思った。それは、今回会ったほとんどの帰国青年が日本での経験をプラスに捉え、フィリピン経済を牽引する若きリーダーとして仕事に取り組む様子が行った先々で感じられたことによるものである。さらに、友情が日本とフィリピンの二国間にとどまらず、他の ASEAN 諸国との間でも育っていることを耳にしたとき、昨今日本の政府開発援助 (ODA) について「顔の見えない ODA」との批判が聞こえる中で、当事業に関しては確実に成果を上げている印象をもった。

これは私見ではあるが、日本の青年も日本での合宿セミナーの参加という形だけではなく、今後 ASEAN 各国やその他の地域に赴き、青年と積極的に交流を深める場を設けてはどうだろうか。これまでのプログラムでは通常、日本青年は数日しか各国青年と行動を共にせず、またその後青年が帰国した後は個人ベースでの交流が続くのみである。

日本政府の企画により種まかれ育った友情がアジアの地域でこれから花開く時、そこに

ASEAN 各国の青年の交流だけでなく、日本の青年もアジアの一員として参加し、逆にアジア各国から私たち日本青年も学ぶことで、「21世紀のための友情計画」という花はより一層大輪の花を咲かせるのではないだろうか。

二、「フィリピン事情一般」

城間 恒浩

フィリピンを訪れたのは、今回で2回目であったが、最初に訪比した時と同じで、今回も文化、習慣、国民性等の違いをつくづく感じる事となった。

まず感じたのが、時間に対する考え方である。マニラの交通事情もあるが、時間に遅れることに対して大変寛容であり、遅れる側も、待つ側もそう気にしない様子が、しばしば見られた。私は、私の出身地の様子によく似ていることから、フィリピンタイムに心地良さを感じた。

しかしながら、フィリピンタイムを引き起こしている一要因と考えられるのは、交通渋滞の深刻さである。マニラでは車のナンバーによる車両規制等、交通渋滞緩和のために数々の対策を講じている。だが、排ガス等の大気汚染もかなり激しく、東京の空気がおいしく思えるくらいであった。

交通渋滞に驚くとともに、交通モラルの低さにも驚いた。のんびりした国民性とは裏腹に、せっかちにスピードを出したり、信号はあっても守らない、車線があることも忘れていたようだし、車のウインカーは飾りとなって使わない、クラクションはバンバン鳴らす、車優先である。フィリピンの車は、ウインカーをなくし、クラクションの音を優しくしてはと考えたくらいである。

また、交通に対するモラルの低さは、歩行者も同様で、車がビュンビュン走っている横断歩道のないところを平気で、車の間を縫うように渡ってしまう。大変危険な光景であった。もちろんいつまでも車が止まるのを待っていると、一日中渡れないからだと思うが、最近では、無謀な歩行者に対する罰則も設けているようだ。こういったドライバーや歩行者に正しい交通モラルを徹底させることは大変だろうが、安全面を考えると急務のように思われた。

私は平成7年度にフィリピン経済Bグループの分野別プログラムを担当、フィリピン青年と2週間行動を共にし、フィリピンの国民性に好感を持つことができた。今回の1週間の滞在では、フィリピンの生活様式、習慣、実情、国民性等様々な面が見られて、大変有意義な時間を過ごせた。やはりフィリピン人は陽気でユーモアがあり、親切心に満ち溢れ、情熱的な人たちだと再確認した。

ホストファミリー、同窓会メンバーの歓待や同窓会のボランティア活動に、フィリピン・ホスピタリティーを心底感じる事ができた。また、親切心、ユーモアや陽気さは決して作り出しているものではなく、根っからそうなのだと思えた。「フィリピン人は、他人のうちはそうでもないが、一度知り合いになると、大変親切にしてくれる」という土田通訳の言葉どおりであった。

そんなフィリピン人たちではあるが、デパートやショッピングモールに働く店員に見られたように、自分の持ち場以外の所には動かないし、座り込んでいる人もいるし、つまならそうに歌っている人もいる。お客に対して興味を持っていないようだ。全体的にそうなのか、笑顔などのサービスが利益に繋がるとは考えていないようで、商売意識が低いように感じた。私としては、日本の店員のように必要以上に寄ってくるよりはいいな、と思い

ながら買い物のできたのであったが、また、小さな子供が町中で物を売ったり、物乞いをしたりという場面もしばしばみられた。裕福な人々は増加しているようだが、まだまだ経済的に恵まれない人も多かったように思う。その中には、教育を受けられない子供たちもいて、国造りに欠かせない人材育成の根幹となる部分がまだ十分に整っていないように思えた。

今まで青年招へい事業で来日した青年やこれから来日する青年は、フィリピンの今後に大きく関わる人たちであると思うが、日本滞在の経験が、彼らにとって有意義なものになり、フィリピンのますますの発展につながればと強く願う。

ホ。「様々な帰国青年の職場を訪問して」

柳澤 智栄

青年招へい事業の仕事をしている私にとって、帰国青年の日本でのプログラムの成果について意見交換をすることは、大変意義深いことである。日本でのプログラムは彼らの現在の仕事にどう役に立っているか、どの点をどう改善すればよいのか、など、訪問する前からあれこれと考えていた。その一方で、青年たちは一体どのようなところで働いているのか、ということも実は私の大きな関心事であった。

日程3日目、経済分野の青年の職場を6カ所訪問した。この事業で来日する青年たちは、ほとんどがエリートである。しかし同じ分野でも、全く様々な職場があるものだと感心した。マニラにいる経済分野の帰国青年たちの多くは、東京の大手町のようなところに当たるマカティ市周辺で仕事をしている。多国籍企業のコンサルティング会社の清潔なオフィス、インテリアデザイナーの青年が勤める建築設計会社のしゃれたオフィス、国家経済開発庁の天井の低い薄暗いオフィスなどなど。しかし、なかでも特に強く印象に残っているのは、チャイナ・タウンにある中国系帰国青年の家族経営の会社と、マカティ市にあるシティバンクである。

その日、マカティ市周辺の帰国青年の職場を3カ所訪問した後、ピノンド市にあるチャイナ・タウンへと向かった。漢字の看板、「抗日…」という碑、雑然とした街並み。私たちはそれまで見たマニラとは全く違う面を見て、興味深く車窓の外に目をやった。ごみごみした道をあちこちと迷った末ようやくたどり着いたのが、Mr. Tan のオフィスであった。その会社は、ポンプ、工作機械などを取り扱っている商社で、同行したJICAの現地スタッフによれば、フィリピン国内では中の上という。彼は父親の経営するその会社の販売部長をしており、ビジネスでドイツ、シンガポール、香港などに出かけるいわゆる青年実業家である。私たちが案内されたのは、パソコンが5~6台ある冷房のきいた綺麗な部屋だった。が、何よりも私たちの目に焼きついたのは、その部屋以外の建物内の様子であった。その部屋への通り道には、取り扱い商品の箱が無造作に積んであり、また商品の袋から中身が散乱して足の踏み場のないほどであった。床には油染みがあり、2階への階段に足をのせると、みしみしと音をたてた。それは日本の零細企業の町工場か倉庫を思わせた。調査団一同驚きと戸惑いの声を漏らす。

その後、再びマカティ市へ戻った。シティバンク勤務のMr. Goを訪問した。それは、真新しく、とても洗練された美しいオフィスビルで、私の新宿の職場よりもきれいだった。フィリピン一速いといううたい文句のエレベーターで最上階の34階へ。そのフロアは会員のみが利用できるラウンジのような所で、バー・カウンターがあった。通された部屋には、テーブル・セッティングが施されており、さらにはマニラ市内が一望できる眺めのいい部

屋だった。調査団一同言葉を失う。そしてようやく感嘆の声を漏らす。チャイナ・タウンの喧騒と町工場の雰囲気は脳裏に焼きついていた私たちにとって、そのギャップはあまりに大きすぎて、一瞬のうちに眠りから覚めたような、あるいは一瞬のうちに眠りに落ちて夢を見ているような、そんな錯覚に陥った気分であった。

この2つの職場訪問は、連続していなかったら、これほど強く印象に残っていなかったかもしれない。しかし、これは私にとって、事実、その日どころか調査団の日程の中で最も鮮明に印象に残ってしまったのである。

(3) 提言

イ. 招へい分野の設定

①問題点

a. 日本側事情

招へい青年の職業的背景が多様過ぎて、日本でのプログラム企画の際、的を絞りにくい。そのため、内容が広く浅くなりがちで、青年が十分満足できるものとはなりにくい。

b. フィリピン側事情

R/Dで決められた分野に基づいて人選しているが、設定された分野が広すぎて選考が困難。また、5年ごとに分野を設定すると柔軟性を欠いてしまう。

②改善のための具体的方策

- その時々によりフィリピンにとって必要な分野の招へいが行われるよう、年毎に招へい分野を設定できるような形式とする。たとえば、招へい分野は各年の両国の話し合いにより決定することなどを明示。
- 招へい分野をもっと限定する。それにより、人選も行いやすくなり、受入側もプログラムのねらいをより明確にできる。

ロ. 青年招へい事業の研修色の強化

①問題点

- JICA事務所及びフィリピン側窓口担当者は、青年招へい事業はあくまで交流事業ととらえている。
- 青年招へい事業の趣旨がよく理解されていない。

②改善のための具体的方策

- 今後、青年招へい事業が研修色を強めていくのであれば、JICA事務所及びフィリピン側窓口とその点十分確認する必要がある。
- 青年招へい事業の特徴など、他の研修コースとの違いをより明確にする。そのため、日本国内のプログラムを典型的にまとめたビデオを作成し、フィリピン側窓口その他へ提供し、当事業への理解を深めてもらう。

ハ. フィリピン側関係者へのプログラム成果の情報提供

①問題点

- 担当窓口であるフィリピン外務省は、人選するだけで、実際研修の成果がどの程度のものかうかがえない。

②改善のための具体的方策

- ・ フィリピン外務省へ、日本でのプログラム内容、青年招へい事業の評価報告書を提供する。
- ・ 招へい青年に対して、帰国後フィリピン外務省へ報告書提出を義務づけること。

二. 日本でのプログラム内容

①問題点

- ・ プログラムについて事前の説明不足の場合、招へい青年はプログラムのねらいが分からず目的意識が低くなる、あるいは自分の職務関連の研修ができると期待をしすぎる、などが起こり、受入側も招へい青年も、プログラム内容に対して不満が残る。
- ・ 今回の訪問で、多くの参加青年から、もっと他国青年との意見交換の場が欲しかった、という意見が聞かれた。

②改善のための具体的方策

- ・ 全体、都内、地方の各段階でのオリエンテーションのときに、プログラム内容およびそれを企画した意図を明確にし、青年の参加意欲を高め、プログラムのより一層の充実を図る。
- ・ プログラムの中に、技術研修で取り入れている、カントリーレポートの発表を盛り込むと、その要望に応えられるのではないか。

ホ. 参加青年の情報処理

①問題点

- ・ フィリピンの帰国青年（84年からの13年間で1,800人）に、年2回、日本から『DEAR FRIENDS』を送付しているが、行き先不明が相当あり、返却されてしまう。

②改善のための具体的方策

- ・ 85パーセント以上の組織率であるPAJAF Aのネットワークを利用し、名簿更新を行う。
- ・ 送付に関しても、たとえば、2,000部まとめて、JICAフィリピン事務所に送付し、その後、PAJAF Aに送付業務自体を委託する方法なども検討してはどうか。

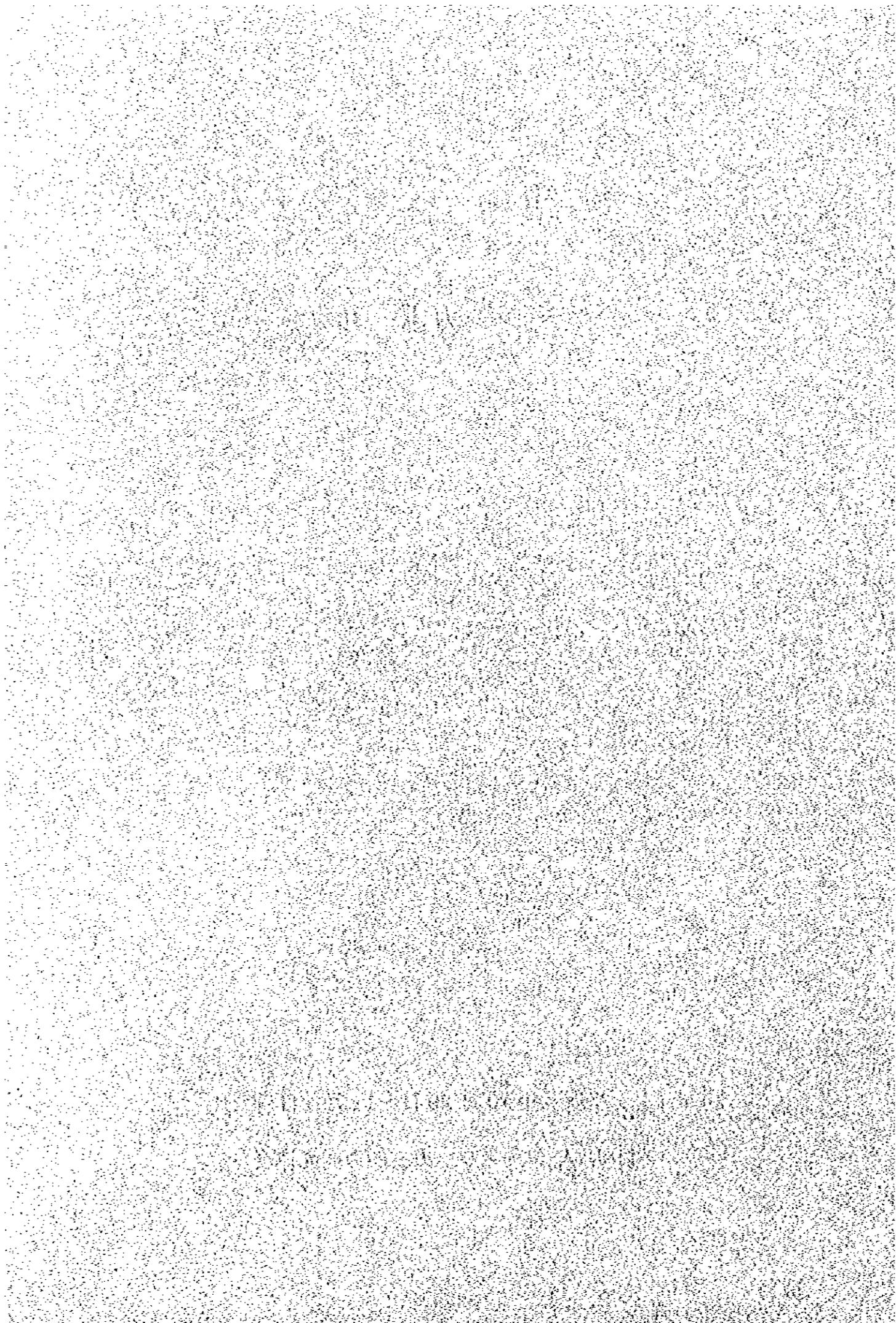
ヘ. 同窓会への支援

- ・ 現地の同窓会の活動は盛んであり、今後の活動もさらに活発化するように思われる。また、同窓会はフィリピン国内における連帯だけではなく、ASEAN間の連帯を図る有効な機構であるため、現地事務所を含めJICAとしての更なる支援があれば、青年招へい事業の支援組織として確立すると思われる。

シンガポール

平成8年10月29日～11月4日

財団法人 ユースワーカー能力開発協会



I. 調査目的

1. 調査目的

- 招へい青年の帰国後の活動、近況報告等の情報をヒヤリングすることにより、両国青年間の交流継続に努める。
- シンガポールの国内事情について把握し、正確な理解に努める。
- シンガポールの青年招へい事業関係者との意見交換により、プログラム改善に有益な情報を得る。
- 技術協力の一環として行われている青年招へい事業がシンガポールにおいてどのような成果を上げているかについて把握する。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団 (Japan International Cooperation Agency : JICA) シンガポール事務所訪問

- シンガポールの一般情勢、JICAシンガポール事務所の青年招へい事業運営状況概要説明

(2) シンガポール外務省ASEAN局 (青年派遣窓口) 表敬訪問

- 青年招へい事業のシンガポール側の担当者及び帰国青年との意見交換
- 青年招へい事業に対する現場担当者の要望、今後の展望等のヒヤリング

(3) 懇親会

- 同窓会組織 (ASEAN-Japan Friendship Association for the 21st Century, Singapore : SAJFA) の最近の活動状況の調査
- 帰国青年の職場・地域における帰国後の活動状況の調査

(4) 人民協会訪問

- シンガポールにおける人民協会の役割・組織運営に関するヒヤリング
- 人民協会の活動内容ヒヤリング
- 青年招へい事業について帰国青年と意見交換と要望事項の聴き取り

(5) 社会開発省訪問

- シンガポールにおける社会開発省の役割についてヒヤリング
- 社会開発省のコミュニティー開発や社会福祉等についてヒヤリング
- 青年招へい事業について帰国青年との意見交換と要望事項の聴き取り

(6) シンガポール貿易開発庁訪問

- シンガポールにおける貿易開発庁の役割についてヒヤリング

- ・シンガポール経済における貿易の現状把握
- ・青年招へい事業について帰国青年と意見交換と要望事項の聴き取り

(7) ホームステイ

- ・帰国青年家庭でのホームステイを通じた、シンガポール人の価値観に対する理解促進
- ・招へい青年のホームステイプログラムの改善点・問題点の考察

3. 調査団員

| | 氏名 | 所属 | 青年招へい事業との関わり |
|------|--------|-------------------|-------------------------|
| リーダー | 元木 了 | 財団法人ユースワーカー能力開発協会 | 分野別プログラム担当者 |
| メンバー | 有馬 毅 | 財団法人ユースワーカー能力開発協会 | 分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者 |
| メンバー | 畑口 真喜子 | 東京電力株式会社 | 分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者 |
| メンバー | 郷 由紀子 | 財団法人日本国際協力センター | 分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者 |
| メンバー | 松本 聡 | 東電設計株式会社 | 分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者 |

II. 調査結果

1. 日程

10月29日(火)

- 11:30 成田発 (JAL719便)
- 17:25 シンガポール チャンギ国際空港着
- 18:30 RELCホテル チェックイン

10月30日(水)

- 10:30 JICAシンガポール事務所訪問
- 11:30 外務省ASEAN局表敬訪問
- 12:30 ASEAN局次長を囲んでの昼食会
- 14:00 シンガポール内観光
- 17:30 ホテル帰着
- 18:30 ホテル出発
- 19:00 懇親会 (同窓会組織「SAJAF A」及びホストファミリーとの交流)
(カートンホテル)
- 21:00 ホテル帰着

10月31日(木)

09:30 ホテル出発
10:00 人民協会訪問
12:00 人民協会職員(帰国青年)との昼食
14:30 社会開発省訪問
16:00 貿易開発庁訪問
18:00 ホテル帰着

11月1日(金)

終日 自主研修及びホームステイ

11月2日(土)

終日 ホームステイ

11月3日(日)

ホームステイ
ホテル帰着

11月4日(月)

06:30 RELCホテルチェックアウト
07:00 チャンギ国際空港到着
08:25 シンガポール発(JAL 712便)
15:50 成田空港着
16:30 解散

2. 主要面談者

(1) JICAシンガポール事務所

岩田 東一 所長
新垣 和成 次長

(2) 外務省ASEAN局

Mr. Jeyaraj Benjamin William (Deputy Director, ASEAN Directorate)
Mr. V Sivaprasad
(Officer handling the ASEAN-Japan Friendship Programme)
Mr. Desmond Ng (Country Officer handling Japan)
Mr. Pang Te Cheng (平成8年度経済B)
Mr. Cheah Sim Liang (平成8年度経済A 2)

(3) シンガポール帰国青年同窓会組織 (S A J A F A)

Mr. Wong Peng Kuan (Vice - President)

Ms. Koh Chai Lian (平成 8 年度社会開発)

Ms. Dina Ibrahim (平成 8 年度経済 A 1)

(4) 人民協会

Ms. Tay Siew Peng (平成 8 年度社会開発)

Mr. Ng Joo Miang (平成 8 年度社会開発)

(5) 社会開発省

Mr. Goh Chye Boon (Deputy Director, Public Affairs Branch)

Ms. Chiong Woon Ling (Public Affairs Officer, Public Affairs Branch)

Ms. Tan Gim Phek (平成 8 年度社会開発)

(6) 貿易開発庁

Ms. Tan Hwee Hsia (Public Relations Officer)

Mr. Kenny Chan Tor Sin (平成 8 年度経済 A 1)

3. 調査結果概要

今回の訪問は前回のチーム派遣からおよそ半年後であったので、前回の調査活動とその後のプログラムによる成果を判断するにはあまりにも短い期間であった。プログラム改善への変化や新鮮さを実感できない調査結果となるのではないかという不安を抱いていた。しかし、実際には帰国青年たちの心からの歓迎と協力に支えられて、彼らの優しさを肌で感じながらの有意義かつ貴重な訪問を体験し、アフターケア調査の本当の意味でのあり方を実感できたように思える。私たち調査チームを温かく迎え入れてくれることで日本滞在の日本側関係者への感謝の気持ちを表しているのだろうと感じた。当事業の成果や意義は単なる帰国青年たちへのアンケートのみを通じてではなく、心の触れ合いによって実感できるのだろう。今後の友情計画から生まれるシンガポール人と日本人との相互理解と友情、及びパートナーとしての関係がより一層深まっていくことを期待している。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換及び聴取内容

イ. JICAシンガポール事務所

①シンガポールでの青年招へい事業

近年シンガポールが、OECD (経済協力開発機構) より、途上国を卒業し、More Advanced Developing Country と評価されたのをきっかけに、日本の政府開発援助の対象国から除外されることになった。それに伴い当事業も、平成 10 年をもって終了することが決定している。

②日本・シンガポール・パートナーシップ・プログラム

これまでの援助国—被援助国という関係に代わるものとして、平成6年から日本とシンガポールが協力して他の開発途上国を援助する「日本・シンガポール・パートナーシップ・プログラム」が開始された。

このプログラムは主に日本の技術研修をシンガポールで行うというものだが、両国の人材・資金・技術を組み合わせ、周辺の開発途上国が発展するために尽力することを目的としている。このプログラムでは開発途上国に対して日本とシンガポールが「第三国研修」と呼ばれるものを行っている。「第三国研修」は1994年以前にも行われていたプログラムであるが、日本側が経費のすべてを負担していたのに対し、パートナーシップ・プログラムでは両国が経費折半で運営している。実施機関はすべてシンガポール国内に存在し、インテリジェント技術、ソフトウェア技術、空港管制、環境汚染管理、上級経営診断などの研修コースがある。また、こういった研修のほかに、他国の災害時の緊急援助を両国が協力して実施したりもする。たとえば、物資援助を行う際に、国によっては成田から運ぶよりもシンガポールからの方が断然早く運べるというメリットがあることから、テントや毛布等の日本製品をシンガポールに常に備蓄している。1999年にこのプログラムは終了することとなっているが、2000年以降もパートナーシップとしての関係を継続したいという強い要望がシンガポール側から挙がっている。

ロ. 外務省

面談者：Mr. Jeyaraj Benjamin William (局次長)

平成8年度経済グループ参加青年 4名

青年招へい事業の窓口である外務省ASEAN局を表敬訪問した。

帰国青年からの意見は次のとおり。

- ・ 自由な意見交換の中で個人として日本人と交流でき、より一層の相互理解に役立った。
- ・ ホームステイや合宿セミナーで知り合った日本人とは今でも手紙やインターネット等を通じて連絡を取り合っており、実際に何人もの友人が個人レベルの付き合いでシンガポールを訪れてくれた。
- ・ 企業訪問では、実際の現場を目の当たりにでき、非常に参考になった。
- ・ 講義はレジュメを事前に配布してもらえれば、予習もでき理解がより一層深まるだろう。

ハ. 人民協会

面談者：平成8年度社会開発グループ参加青年 9名

人民協会は、多民族国家であるシンガポールの民族調和と社会の結合を促進する目的で1960年7月1日に設立された地域社会開発機関である。国家の基礎団体として、統合力のあるダイナミックかつ洗練された文化を有する国を教育・社会・文化・スポーツ等を通して作り上げることが人民協会の使命であるとされている。

人民協会の主要目的は、人民協会は国内に110を数えるコミュニティーセンター、コミュニティークラブを運営している。コミュニティーセンター（以下CC）では様々な人々のニーズにあわせたプログラムが組まれている。幼児・児童を対象にした幼稚園や工作教室、96のCCで行われている青年を対象としたリーダーシップや自己啓発研修、キャンプ

やトラッキング等の野外活動、高齢者を対象としたルールを簡略化したスポーツ競技、カラオケ、簡単なステップの社交ダンス等のプログラムが主なものである。

今回協力してくれた帰国青年たちの多くも、こういったCCの中で働いており、シンガポールの地域社会開発に大きく貢献している。

二. 社会開発省

面談者：社会開発グループ参加青年 3名

①役割と組織構成

社会開発省の目的は社会を統合された堅固なものにすることであり、第一に「家族の絆を強める」をキーワードに活動している。その社会開発省は Family Development、Family Support、Administration、Community Affair、Computer の5つの部門で構成されている。また、その中核をなす Family Development と Family Support 部門は人民協会、シンガポール・スポーツ・カウンシル、そしてナショナル・カウンシル・サービスを統轄している。

②活動内容

- ・ 既婚の女性も働けるようなチャイルドケア
- ・ 老人・身障者のデイケア、独り暮らしの老人の定期訪問
- ・ 犯罪歴のある若者にもやり直しのチャンスを与えるシステムづくり

等、多くのボランティアの活躍によって支えられている。

社会福祉は、国民一人一人に平等に与えられるべきであり、そのためにはコミュニティーと政府がその理念を共同で分かち合わなくてはならないと考え、その背景には恵まれている人々はそうでない人々を助けなければいけないという意識がシンガポール国民の中に根づいている。しかしシンガポールは福祉国家を目指しているのではなく、互いに面倒を見合うということがあってもそれに頼り過ぎないように、あくまでも自分で自分をサポートするというのが基本的考えにある。

③当事業への青年の評価

本当の日本人の姿を見ることができた、長い付き合いのできる友人ができた、日本に対して持っていた間違った考えに気付いたといったものが挙げられた。要望としては、意見交換の時間がもっとほしい、もっと同じ分野で働いている日本人と話ができるようにしてほしいというのがあった。

ホ. シンガポール貿易開発庁

面談者：平成8年度経済グループ参加青年 2名

①役割

貿易の拡大を通じてシンガポールの繁栄を大きくするという目標を置きながら、シンガポールの財貨とサービスの海外販売を促進し、新しい市場を開拓し、国際的貿易業者をシンガポールに基づくようにひきつけ、国内の対外貿易業者を助長することによってシンガポールを第一の国際貿易の中核として開発することである。その主な手段として、海外の支部を接点として、集めた情報を国内外に流し、関心を持ったビジネスマンとコンタクトを取っていく。

②当事業への青年の評価

仕事や結婚に対する考え方の違いを理解し合えたことや、日本という異なる国や経済システムへの認識を深めることによって視野が広がった。

(2) 交流会

イ. 懇親会

出席者：調査チーム 元木 了、畑口 真喜子、郷 由紀子、松木 聡、有馬 毅

JICA事務所 岩田 東一 所長、新垣 和成 次長

SAJAF A (青年、ホストファミリーを含む)

Mr. Koh Chai Llon, Ms. Ho Siw Kee,

Mr. Lee Wai Chung Brennan, Mr. Tay How Kia

Ms. Dlna Ibrahim, Ms. May Chan Moe Chen

Ms. Chung Lai Thoe

SAJAF Aのメンバー及びホストファミリーとカールトンホテルの中華レストランで懇親会を行った。2つの円卓に別れて懐かしい顔ぶれの青年と料理をつつきながら再会の時を楽しんだ。

(3) ホームステイ

| 氏名 | ホスト氏名 | ホスト職業・参加年度・家族構成 |
|--------------|-------------------|-----------------|
| 畑口 真喜子 | May Chan Moe Chen | 大蔵省職員 平成8年度 |
| 郷 由紀子 | Chung Lai Thoe | 貿易開発庁職員 平成8年度 夫 |
| 松木 聡 有馬 毅 | Tay How Kia | 人民協会職員 平成8年度 |

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

帰国青年たちには仕事で忙しいにもかかわらず、休暇を取ったり、仕事を早く切り上げたり、時間がある限り私たちのお世話をしてくれたことに心から感謝している。彼らのおかげで今回のシンガポール訪問は「友情計画」の成果として生まれた彼らの友情を実感できたという点で、非常に有意義なものとなった。

ただ、今回の調査は前回よりも滞在期間が短かったにもかかわらず訪問先が増え、ハードなスケジュールとなった。また準備期間も十分ではなかったため、欲を言えば、もう少しゆとりのある訪問としたかった。

青年との意見交換に関しては、シンガポールに対しては平成10年で青年招へい事業を終えるという日本側の決断への彼らの率直な意見や将来のシンガポールと日本間の関係のあり方についてもっと深く語り合いたかった。

(2) 団員所感

イ. 「アフターケアチームに参加して」

畑口 真喜子

私は、平成8年度6月にシンガポール経済A1グループの合宿セミナーに参加した関係で、今回アフターケアチームの一員として派遣された。4カ月という短いインターバルで相手国を訪問し、青年と再交流できたことは私にとって大変貴重な体験であり、このような機会を与えてくださった関係者の方に感謝申し上げたい。

[シンガポールの国内事情]

JICAシンガポール事務所の方から、シンガポールは途上国を卒業し、more advanced developed country になったと説明を受けたが、実際に発展の様子を目の当たりにすると、なぜ先進国と評価されないのか不思議なほどの繁栄ぶりであった。整備された広い道路には高級車が走り、歩道を歩けばあちこちで携帯電話のベルが鳴り響く、オフィス街にはしゃれたデザインの高層ビルが立ち並び、どのビルに入っても過剰なほどの冷房がきいている。空港や港から街の中心へのアクセスのよさ、よく計画された町並みの美しさ、通信費用を含む物価の安さ、国際化の進展具合などを考えると、むしろ日本より発展した国なのではと思えるほどであった。

またシンガポールは複合民族国家であり、多民族が共生しているその姿は、コスモポリスという未来の世界のあり方の原型のように思えた。多くの看板、標識は4カ国語で示され、各民族が他の文化について理解を示していたことが印象深かった。若い世代は国際語である英語を母国語として流暢にあやつり、国際化していく社会にも抵抗なくとけこんでいるように見受けられ、うらやましい限りであった。

今回は先方側関係政府機関として、外務省、人民協会、社会開発省、貿易開発庁を訪問した。各機関で温かく迎え入れていただき、この事業に対する先方の認識と理解が感じられた。当事業についての意見交換のほかにも、日常業務について説明を受けたが一番印象深かったのは、政府が個人の生活に介入する度合いの大きさであった。人民協会設立の趣旨は、芸術文化スポーツ福祉を通じて市民の相互理解を深めることである。貿易開発庁は、多国籍企業や国内企業の海外進出をサポートする活動をしている。社会開発省のキーワードは、統合された社会のために家族のきずなを深めることだそうだ。現代の日本人であれば干渉の度が過ぎるとうるさく思うかもしれないが、小さな国土で最大の資源が人材（このフレーズはよく聞いた）であるシンガポールではこれが適正な見地なのであろう。個々の人の少数意見を尊重しながら、全体の利益を図ろうとすると矛盾や困難が生じやすい。古い商店街一帯を取り壊し大規模に再開発している現場に、立ち退き拒否の家屋が見られないのを見て、空港や軍の墓地、原子力発電所の立地に悩む日本との差を感じた。

次に印象的だったのは、女性が生き生きと働いていたことである。シンガポールでも、日本同様晩婚化が進み、政府はやきもきしているようであるが、一方、女性も貴重な労働力として活躍が期待されているようである。働く女性をサポートする背景として、通勤時間の短さ、およびホーカーセンターと呼ばれる屋台が住居のそばにあり、安価に外食できることなどが挙げられると思う。

[帰国青年との交流]

合宿セミナー、池袋のホテルメトロポリタンで行われた歓送会に参加した後、E-mailや写真の交換などで連絡は続けていたものの、再会したときの歓迎ぶりにはほっとさせられ、旧友に会ったような気分になった。また初対面の青年にも温かく迎えてもらい、この

友情計画を通じて日本に対する理解が深まっていることが実感できた。

日本滞在の印象を尋ねると、講義や企業訪問等もちろん有意義であったがホームステイや合宿セミナーといった交流が印象に残っていると答えた青年が多かった。ホストファミリーとは電話や手紙で連絡をとり合っていて、日本の地震のニュースを聞き、すぐに無事を確かめる電話をかけたという話を聞いて、うれしい気持ちになった。私自身もこの夏の食中毒騒ぎの際に心配してくれているメールを受け取ったのを思い出した。

私の参加した合宿セミナーは討論と交流が半々で無邪気に遊ぶ青年の姿が目についでいたのであるが、本国での青年は職場の中堅で責任のある立場をもって活躍しており、私にとってはそのギャップが面白かった。そしてそのように仕事や学業に多忙な青年たちが私たちのために貴重な休日を使って集まってくれたことが非常にありがたかった。

最初のうちは地元民ならではの、ひねりをきかせた観光名所を案内してもらったり、屋台で珍しい料理を食べたりして盛り上がっていたが、だんだんうちとけると、語学には難があるものの、日本の友人といるのと同じように自分のことを話したり、社会の問題について意見を言ったりできるようになっていき、国籍の壁を越えられたような気がした。私は外国の人々と接してこのような気持ちになったのは初めてだったので、このような体験を是非多くの若い人にも味わってもらいたいと強く思った。

最終日の日曜にはセントーサ島というレジャーアイランドへ出かけた。水族館へ行こうという軽い気持ちだったが、そこにあるシンガポールの歴史館 (Image of Singapore) に入ることになった。シンガポールの歴史を蠅人形で説明してあり、当然太平洋戦争時の日本占領時代の展示もあった。展示事体は残酷な場面をことさら強調することなく客観的なよくできたものだった。しかし、日本の教科書の視点とは少し角度が違うので、シンガポールを訪れる日本人の方にはぜひ見ていただきたいと思う。そして何よりも私が感動したのは、祖先が被害者と加害者である（私は歴史の結果としてこのように判断できている）私たちが一緒に戦争の展示を見て、気まずさが残らなかったことである。もっとも歴史館に入る前に、私たちはもう新しい世代だから気兼ねは不要だと言ってもらっていたせいもあるのかもしれないが、それまでにいろいろな話をして情が生まれていたおかげであると私は信じている。一方で、シンガポール青年も、広島で原爆の展示を見たことはいい経験だったと言っていた。双方が自分たちの歴史を知っておくことの必要性を感じた。

[アフターケアを終えて]

冒頭で述べたとおり、非常に貴重な体験であった。初対面からうちとけて友情が育まれていく過程が自分でも分かった。言葉の壁もあり、2泊3日の合宿セミナーでは時間が足りないかもしれないので、私自身の反省も含めて、青年が日本にいる間に自ら来日青年に対して交流を働きかける努力が必要なのではないだろうか。

語学については、言葉の少なさが痛感された。自分の感動した気持ち、感謝の気持ちを言い尽くせないのはかなり歯がゆかった。

シンガポール青年も日本青年も仕事を持ち、ある人は家庭と両立させながら、忙しい毎日を送っており、同窓会活動への参加もなかなか難しい人が多いかもしれない。昨今は通信手段が発達し世界が狭くなっているのだから、青年招へい事業のホームページをつくってそこで活動報告、近況報告などを掲載し、参加者がアクセスできるようにすれば、気軽に接触を持てるのではないかと思った。

最後になるが、この青年招へい事業は相手国と日本との相互理解に非常に役立っているということが実感された。日本はアジアの他の国との関係をまだまだ深めていかなければならないと思われる。シンガポールと日本との青年招へい事業も技術協力の段階が終わっても、人的交流に意味を見いだして続いてほしいと思った。おそらく問題解決にお互いの異なる視点を取り入れるといった実際的な効果もついてくるはずである。

ロ. 「Singapore is a FINE city」

郷 山紀子

知人がTシャツを着ていた。胸に“Singapore is a FINE city”とあった。それを見たとき、ものすごくおかしかった。“Fine”には「素晴らしい」や「天候が晴れた」という意味のほかに、名詞として「罰金」という意味もある。

シンガポールは、多くの方がご存じだと思うが、非常に重い罰金で有名。たとえば冷房のきいた公共の場での喫煙（ホテルの通路も）、鉄道（MRT）車内での喫煙、飲食ゴミのポイ捨て、歩道橋・地下連絡通路・横断歩道が50メートル以内にある一般道の横断などなど。

ゴミはきっと落ちていないだろうと思ったが、吸い殻さえも落ちている。と、いっても日本と比べれば断然少ないが。

横断歩道は道路にしま模様がなく、歩行者用の信号は位置が低く、人型のみ色が変わるので結構気付きにくい。車の往來がないのを見計らって横断する人はいた。自分もある時、車の往來がないのを見計らって道路を渡ろうとすると、シンガポールの友人に止められた。「50メートル以内は罰金よ」と。罰金は\$500（約4万円）や\$1,000（約8万円）と思いのほか高額。

「シンガポール政府は罰金のおかげで歳入が多いんじゃないの？」と私は冗談を言った。しかしシンガポール人は罰金を払うのはそんなにいやでもないらしい。“Singaporeans are willing to pay fine”とのこと。罰金を課してもゴミのポイ捨ては改善されないようで、今では罰金に加え見せしめとして公共の場を掃除させる刑（？）も課すそうだ。ゴミはごみ箱、くずかごに捨てればそれはそれで問題ないのだが、ゴミに関し、ひとつ気になることがあった。それはシンガポールではゴミの分別を実施していないことだ。

日本ではほとんどのところで可燃物、不燃物と分けてゴミを捨てる。リサイクルに熱心な地域は不燃物をさらにビン、缶（アルミとスチールに分ける）、またプラスチック容器、使いきった乾電池とに分けて収集するので、シンガポールで缶も紙くずもいっしょに捨てるのには抵抗があり、“I feel guilty”という、シンガポールの友人もリサイクルの重要性は理解しているようだった。

罰金制度に加え、シンガポール政府は“Courtesy campaign” -常にスマイルを-とか、“National exercise campaign” -首相も先頭きってエアロビクスをする-と、そこまで政府がやかましく言うか！ということもしている。ゴミの分別も同じ調子で政府が音頭をとって進めていけばいいのにと伝えると、「シンガポール人は教育するのに時間がかかる」という返事が返ってきた。シンガポールでは日本の情報がよく入っている。招へい青年たちは、「日本のことは見たり、聞いたりして知ってはいるが、やはり直接、日本の文化、社会を体験することはよかった」と口々に言う。百聞は一見にしかず。果たして日本滞在中、ゴミの分け捨てを彼らは経験することはできただろうか。

「シンガポールはこんなに発展したのだから、もう日本から学ぶことはないんじゃない

の？」という意見が出された。また青年たちは合宿セミナー、ホームステイ、といった人との交流が特に印象的だったようだ。

彼らの意見から思うことは、合宿セミナー、ホームステイは、日本人と生活をともにすることで、日本人と同じ目線で日本の文化、社会を体験でき、日本から大いに学ぶ機会となるのではないだろうか、ということだ（人的交流で同時に日本人もシンガポール青年から学ぶ機会となっているのは言うまでもない）。たとえば、ゴミの分け捨てを日本人との生活の中で経験すればリサイクルの重要性を再認識することとなるのではないか。シンガポールも日本も資源に乏しく、原料の輸入に頼らなくてはいけない国。リサイクルの概念の導入はこれからのシンガポールに必要なと思う。ただ、面積の狭いこの国は、埋立てをして国土を大きくしている。すると、ゴミも大切な資源か？

シンガポールの将来を罰金制度に、ゴミの分け捨てに関してもいつの日か規制が盛り込まれればよいと思う。そうすればシンガポールはさらに“Fine” cityになることだろう。

八、「はじめてのシンガポール」

松木 聡

今回のプログラムにおいては、スケジュールの前半は政府機関などの訪問を中心とし、後半は現地青年との交流が行われた。訪問先の政府機関は、過去に青年招へい事業に参加した青年たちの勤務先であり、現在でも日本への関心を強く持っている人が多かった。そのためどの機関でも、表敬や意見交換等の際、万全の受入準備がなされていたように感じた。また、各訪問先には通訳者が同行していたため、より正確な理解を深めるのに有効であった。

人民協会で行われた説明の中ではおもしろい印象を受けた。それは政府が国民の早期結婚を推進する運動として、人民協会内にお見合い用のスペースを設け、加入者を募集しているというものだった。他の機関での交流の席でこのシステムについて質問したところ、数々の特典も設けられるとあって広報の方も通訳の方も利用しているとのことだった。日本と同様晩婚の傾向があるそうだが、政府がお金を出すということは人材・資源不足といわれるシンガポールがより深刻な事態に直面していることの表れではないだろうか。

社会開発省では日本人側が老人福祉について詳細な説明を要望し、それに応えてシンガポール独特の福祉システムの紹介があった。それはボランティアプログラムのほかに親の近所に住むことにより国からの住宅補助が与えられるというものだった。これは非常に有効で理想的な対策であると感じられた。現にホームステイをした青年の場合も兄弟が両親宅の隣近所に居住していた。しかし同じような制度を日本で行った場合、国土面積の差や通勤、転勤などの問題をクリアすることがまず難題であり、実行するのは容易でないだろう。

また、ボランティアに携わる人たちにはどのような関係の人が多いのかという質問に対し、学生・主婦が中心で若いうちから教育の一部として取り上げられているという答えが返ってきた。このような部分に彼らの言う政府と社会の共同で行う福祉があるように感じた。

青年との交流の際は、ホストファミリーの How Kia をはじめ随時 10 人ほどの青年たちにお世話をしてもらった。彼らは国際的な問題や自国と他国の違いを話題の対象とすることが多いのが印象に残っている。それに加えて自国の内情にも非常に高い関心と期待を示していた。

シンガポールの政府は国民の細かいところにまで干渉し過ぎるとよく聞いていたが、実際にお見合いや政府や福祉においても、政府の意図が青年たちの生活に反映されていた。

土地の少ないことがあってか、一般的な生活には、さほどの豊かさは感じられなかったが、接した青年たちからは心のゆとりと様々なことへの改善の意欲が伝わってきた。シンガポールのような規律の厳しい国でなぜ不満が爆発しないのか不思議だったが、そこには与えられるだけの意識だけでなく、シンガポールの全体像を念頭にしている人たちが多いからだと感じた。

ホームステイは当初1泊の予定がホストファミリーの好意で2泊に変更となり、ホテルにいるよりも現地青年たちと有意義な時間を過ごすことができた。

今回、この調査チームに参加させていただき、国内、現地の多くの関係者の準備によって貴重な体験をすることができた。今後より深く他国のことに興味を持ち続けていくようにしたい。

二. 「今後の友情計画への希望」

有馬 毅

このたびのシンガポール訪問は私にとって今年二度目のアフターケア調査となり、この機会により得た貴重な経験を今後のプログラムの発展、そしてシンガポールと日本の相互理解・友好関係をさらに深めることに活かしていきたい。

私はこの青年招へい事業に関しては、日本青年としての合宿セミナーに一度参加し、実施団体の一員としての都内プログラムでの少々のお手伝い、そして二度のアフターケア調査チームへの参加を体験しただけである。当事業を十分に理解する経験を積んだという段階までは来ていないが、多くのシンガポール人と接することによって、このプログラムが彼らと日本人の心のレベルを高め、友情を築き、その絆を深める上で非常に価値のあるものであり、今の時代には大切なものだとことを実感した。これを前提に考えると、この事業をODAの一環としてだけ行うというのはとても残念である。この事業の本当の良さは、様々な分野で日本が発展したと思いついでいるシステムを日本を訪れた青年が積極的に学んで自国の発展に役立たせるといったレベルだけのものでは決してない。人間らしく生きるということが重要視され始めている今の日本世の中では、大切なのはシステムよりも心である。優れたシステムなら日本からだけでなく他の国々からも学ぶことができ、むしろ日本が彼らから学んでいかななくてはならないことが多いように思われる。友情を築いていくという観点においては、当事業を援助国・被援助国間のものという姿勢を今後も続けなければいずれ厄介なことになる。彼らがこの事業に求めているもの、そして彼らと同様に、いやむしろ彼ら以上に日本人が得るものは、よくある大人の社会での利害関係を伴うビジネスレベルでの人脈ではなく、無欲で温かい真の人間関係である。それを与え得る素晴らしいプログラムであるからこそ、時代の変化に対応させながら永く続けていく意義がある。もしこの事業をもっとグローバルに活用できれば、開発途上の段階であると評価された限られた国々だけでなく、先進国といわれる国々とも協力し、展開していけば、もっと深く国際交流の意味と大切さを見いだせるのではないだろうか。

シンガポールが途上国を卒業し、先進国の仲間入りを果たしたという理由で、1994年からシンガポールと日本の人材、技術力、資金力を組み合わせて後発の開発途上国の経済発展を支援する「日本・シンガポール・パートナーシップ・プログラム」が始まった。「パートナーシップ・プログラム」はそれなりに意義のあるプログラムであり、1999年に終了

するということであっても、シンガポール側からの高い評価と 2000 年以後もパートナーとしての関係を維持していきたいという強い希望があることから、何らかの形で継続されていくだろう。しかし青年招へい事業は、約束の 1998 年に、終止符を打つようだ。「パートナーシップ・プログラム」はある意味で経済的豊かさを追求するものであるのに対し、青年招へい事業は心の豊かさを追求する。両国の青年たちが互いを認め合うことで心を豊かにしていく素敵なプログラムを、途上国でなくなったから終わりにするというのは非常に理解し難い。こういったメンタリティーを持っていることが日本の弱点なのではないだろうか。たとえば ODA の枠から外すにしても、政府間の協力で 1999 年以降には日本がシンガポールの青年を招へいするだけでなく、日本の青年にもシンガポールを訪問してもらい、相互理解を更に深めるプログラムを実施する。そしてそれがアメリカやヨーロッパ等の国々にまで拡大されるプログラムとなれば、青年招へい事業の良さがこれからのポスターレス社会で活かされるのではないだろうか。

事後調査訪問を、日本側は「アフターケア」といい、シンガポールや他の国々は「フォローアップ」という。どちらが適切なのかは分からないが、「アフターケア」を英語の辞書で調べてみると「病後の手当、後療法、仮釈放中または刑期満了後などの補導」等とある。ふさわしい訳が見つからない上、「俺たちがお前らの面倒を見てやっているんだ」というニュアンスが含まれているように思える。英語と和製英語のニュアンスの違いやその目的への理解の仕方が少しでも異なると、そこに誤解が生じる。もしアフターケアが適切な言葉でないとすれば、見直す必要がある。対等の立場で互いに学んでいこうという姿勢を見せないと、心を開いてくれる相手を傷つけてしまうということも起こり得る。

テーマはこの先、日本がシンガポールに対してどういう存在でありたいのか、どう接したいのかを表現していくことにある。1998 年までの残された青年招へい事業には、将来さらに充実した新しいプログラムの企画、実施に繋がるような有意義なものであってほしい、私自身それに貢献できたら幸いである。

ホ. 「シンガポールの環境」

元木 了

1996 年 10 月 29 日 (火) 17:25 シンガポール着、国際協力事業団 (以下 JICA) シンガポール事務所のお世話により、RELC ホテルに到着。空港からの途中の景色はうわさに聞いていたとおり、緑が多く清々しい景観であり、暑さも気にならないほどであった。

翌 30 日は JICA シンガポール事務所を訪問。所長から同所の活動概要を聴き、その後 11:00 外務省 ASEAN 局を訪問。青年招へい事業に参加した青年たちが出席し、来日した時の感想及び今後への期待を話し合った。

総じて彼らに大きな印象を残したのは合宿セミナーとホームステイであり、受入側の家庭の問題もあり、非常に楽しい印象を持った人と、逆の印象を持った人がいて難しい問題ではあるが、概して強い印象が残ったようだ。引き続き友好を深めている人がかなりいるという報告も聞かれた。昼食会には Benjamin 局長も出席され、長時間にわたり訪問団との会話に時間を割いていただいた。夕刻の SAJAF A との懇親会まで、JICA の好意でマイクロバスを使用してもらい市内見学。改めて緑の多いのに感心する。また、ホテル、マンションの建設ラッシュにも驚く。自由時間には地下鉄を利用して島をできるだけ詳しく観察することにした。

夜の SAJAF A との懇親会は総勢 20 人で、皆日本での思い出話などで楽しいひととき

を過ごす。

31日(木)は人民協会を訪問した。昨日の懇親会に出席された方や以前に来日された方も数人おり、協会の運営方針と概要の説明を受ける。国の政策として協会に結婚あっせん所を設けるなどユニークな点もあった。午後は社会開発省、貿易開発庁を訪問。どちらも、JICAの招へい事業で参加された青年が出席し、外務省とだいたい同じような発言で、青年同士の交流にもっと時間を割いてもらいたい意向であった。総じて、シンガポールの青年たちは来日したチャンスに同世代の人との十分な対話を望み、将来を担う人同士で、忌憚のない意見の交換を求めていると考えられる。

11月1、2、3日は地下鉄でシンガポール郊外の探索をした。強く感じたことの一つはマンション及びホテルの建設ラッシュ。特に西端、東端は駅の周辺は町全体がマンションといった状態である。おそらく国全体で建設中のマンションは数十万戸にもなると思われる。シンガポールは非常に土壌が悪く、手入れの行き届いた緑地と一部の森林地帯を除くと、赤い地面が露出していたり、育ちの悪い芝があるだけで農耕地は見当たらない。この国は人材が貴重な財産で外国の人的資源の移入も必要なのだろうと思われる。

環境に関してはタバコの吸い殻、ゴミのポイ捨てに罰金制度があるが、町の中はもちろんのこと、公園その他のいたるところに屑かご・灰皿が設置されており、ポイ捨てをしなくてもよい環境を設定してある。ゴミの収集に関しても清掃員が定期的に回収し、あふれないように徹底している。環境保全を考えると、行政において指導とともにそれを実行できる体制を整えていかなければいかなる法律を施行しても絵にかいた餅にしか過ぎない。

(3) 提言

イ. 問題点

日本側の合宿セミナー参加者がシンガポール青年側の希望にあまりかなっておらず、同じ分野で仕事や勉強をしている、あるいはそれに強い関心を持っている者同士の意見交換が十分にできていない。

ロ. 問題点の原因または理由

日本人青年募集のアプローチ対象組織の範囲が狭い。

ハ. 改善のための具体的方策

従来どおりの限られた組織だけを対象にするのではなく、その分野に実際に携わっている青年がいる組織の発見に努める。

ニ. その他

これはアフターケアチームに参加した者としての要望であるが、私たちが調査を行い、その結果をこのように報告書として提出した後、それが「青年招へい事業」にどのように反映されていくのか具体的に知ることはできないであろうか。